

SINKO レトロ

S
I
N
K
O
レ
ト
ロ

作・中野浩作

登場人物

キリハラ

⋮

嘘つきになってしまった男

タカイ

•
•
•

嘘つきの女

ポコペン

•
•
•

マシユマロジャンキー。ケシゴムが作ったマシユマロの器

アオバ

⋮

マシユマロジャンキー。多重人格。

山田

•
•
•

マシユマロジャンキー。ポコペンを自分だと思い込む。

クチナ

•
•
•

マシユマロジヤンキー。忘れ者。

ケシゴム

⋮

フルムーンの主人。

蟹

OP

開場中の劇場。

劇場内を好き勝手に動き回っている、ポコペン、クチナシ、ヤマダ、アオバ、蟹たち。ジャンキーと蟹たち、何事かぶつぶつと呟いている。

一同

「知ってか知らずかお前の名前、名前を知って何になる？」

顔、顔、顔顔顔。

ポコペンポコペンだぐれがつつゝいたポコペン、ポコペンポコペンだぐれもいらないポコペン、ポコペンポコペンだぐれがつつゝいたポコペン。

昨日の山のあの奥の、
国に隠れた頂に、

明日と変わらぬ私の顔、顔 顔顔顔。

欲しいほしいと呟いて、結局最後にや日が暮れる。

名前がないのと顔がない、心がないのは一つに連なり、有象無象の嘘と化す。欲しいほしいと口ばしりや、

誰もかれもが疎む顔、いっさいがっさい詰め込んで、月面旅行の嘘八百に、騙し騙されざまあみろ、

みんながみんな都合よく、手には入らぬ欲しいもの。

欲しいほしいと口走り、手に手に入る荒唐無稽、

無形の物事、至上の極意、だけれど誰も知りませぬ、知ってはおつても認めませぬは、

この世の常の無情かな、無上の日々など、とんと来ず、ただただ日々をひた送る、ひたひたひたひただ送る。

散った散らかり、

散らかりつくし、

つくしの生える崖の上、

上に伸びるは進化の証と誰が言ったかロケット飛ばし、

飛ばして飛ばして吐いた夢、

否、

思考の陰りと思考の加減、

具合状態不具合不信、不信論者の鐘響く。

ごおーん、ごおーん、

進行。すすむはこの体、

信仰、崇めた墜落論、

侵攻、この胸碎けてはぜる。

ぱりーん、ぱりーん。

ロケット飛ばせよマシユマロ燃料。マシユマロ詰め込みやれ飛ばせ。

忘れた名前を欲する私、

あの空飛んで、さらに上、バラバラ碎ける私の異名、名は、何という？

飛んで飛ばして花咲いた、心の市場に飛ぶ菓

菓と笑わぬ恒常的な真実無形の恐縮論者。

誇大妄想笑ってみても、自身の鏡に顧みる（以下、繰り返し）」

不意に、ポコペン、出入り口を見やる。
同時に蟹たちもそちらに視線を送る。
キリハラ、タカイ登場。

キリハラ 「僕は、正直者です。ええ、そりゃあもう、正直者です。嘘なんて、ついたことはありません。でも、この世の中では、正直者を貫き通して生きることがそりゃあ、困難なようで。建前。おべっか。お世辞。気の利いた言葉の一つもつけない。だって、思っていないことは言えないでしょう？ 違いますか？」

タカイ 「私は嘘つきです。正直者の気持ちなんて知りません。正直者には2タイプの人間がいます。正直者という自分をうまく利用している人間と、そうでない人間。彼は後者のタイプ」

キリハラ 「社長！ あなたの会社に僕は就職させていただきましたが、僕はあなたの経営方針は間違っていると思います！！ よ、専務！！ 奥さん置いて、女子高生ですかあ？ とんだゲス野郎ですわねえ」

ヤマダ 「思っていることの逆の言葉を選ばいいだけなのに。馬鹿みたいです。ええ、私の目にはそう見えます」

キリハラ 「出世する後輩たち。疑問なんです、正直者ってダメなんですかね？」

クチナシ 「ダメです」

キリハラ 「領収書の一つもごまかすことのできない僕は、そんなに悪い人間ですか？」

蟹1 「悪くはないけど損ばかり」

キリハラ 「ごますって。適当にほめて。本音を言わないで、我慢して、言いたいこと言って何が悪いんだよ！！」

アオバ 「正直者で、人生渡り歩くことが下手くそだって、別に人生そんなに捨てたもんじゃない」

キリハラ 「そんなことない。頼らないって決めた」

タカイ 「妙な決意はいらない。自分の欲しいものなんていらぬ。ただ、金があればいい。財産。遺産。土地。株。嘘つきになんてならなくてもいい。恵まれているなら、恵まれた環境に甘んじていれればいい。違う？」

キリハラ 「いやだ」

全員 「ただの子供」

キリハラ 「嫌なものは嫌なんだ！」

タカイ 「いい加減にしなさいよ！ 金よ、お金、money money！！ それ以外にあんなにかに価値なんかないのよ！ 金以外に大事なものがどこにあるのよ！！」

キリハラ 「そうだ、嘘つきになれば、きつとうまくいくはずなんだ。僕はきつと、うまいことやれる。そう、嘘つきになればいいんだ」

蟹2 「嘘つきは是か？」

蟹3 「嘘つきは非か」

クチナシ 「是も非も関係なく、求めるか？」

キリハラ 「僕は真正正銘、純度100%の正直者です。嘘なんてついたことがない。違う。嘘がつけぬ。嘘つきは悪だと思ひます。でも、嘘つきになりたい僕を誰が悪だと決めつけることが出来るのでしょうか？」

タカイ 「バカみたいなことを言い始めるのはこれが初めてではなかつた。くだらない正直者にはよくありがちな、くそくだらない幻想をまるで啓示か何かかのように信じる。まるでそれが運命とでも言わんばかりに。バカみたいだ。ああ、バカ正直というのか、これが」

キリハラ 「そうだよ。嘘つきになればいいんだ。そうすればいい。ねえ、久美子、そうだろ？」
全員 「ええ、そうね」

タカイ 「と、私は満面の笑顔で答えてあげた。だって、私は嘘つきでなんだ」

全員 「あなたの好きにすればいいわ」

タカイ 「という、嘘も平気でついてやる。金。お金が欲しい。だから私は嘘つきでいるの。正直者なんて大っ嫌い。こいつが私に出来る最良の選択は」

全員 「私のために財産を残すこと」

タカイ 「そのために生きて、そのために死ねばいい。そんな程度の価値しかない、可愛そうな正直者」

全員 「私はあなたにどこまでもついて行くから」

キリハラ 「久美子！ 僕は嘘つきになるよ。絶対に立派な嘘つきになってやる。嘘つきになって、つまらない嘘をつきまくってやるんだ！」

全員 「その、無邪気さが余計に腹立たしかった」

タカイ 「でも、ニコニコと、静かに微笑んであげる。そうすれば、この男は私を信じる。笑顔の数だけ、優しい言葉が積み重なるだけ、この男は私を信じるのだ」

キリハラ 「久美子！ 僕を信じて！」

タカイ 「あなたのことなんか信じちゃいない。大体、100%の正直者がどうやって嘘つきになるというのだ？ バカバカしい屈託のない笑顔に、いらだちを通り越して憎悪さえ覚えた」

キリハラ 「立派な嘘つきになって見せる！！」

タカイ 「バカなことを・・・と、思っていた。世迷いごとを真に受ける人間の方が、この世の中、増えてきた。何の真実味も無い、ただの虚妄。早く死ね。金を残して早く死ねばいい・・・だのに」

ケシゴム登場。

キリハラ、ケシゴムから、マシユマロを受け取る。

全員 「何それ？」

キリハラ 「マシユマロ」

タカイ 「そうね」

キリハラ 「すごいマシユマロなんだ」

全員 「何が？」

キリハラ 「だから、すごいマシユマロなんだよ」

タカイ 「・・・」

キリハラ 「これで僕は、嘘つきになれるんだ！！！」

キリハラ、マシユマロを掲げる。

タカイ 「マシユマロの白さが、やたらと、目についた」

キリハラ、マシユマロを口にする。

キリハラ&タカイ以外全員 「いらつしやいませ！！！」

一同、詩を口々に吟き続ける。

ケシゴムの周囲に集まる一同。

ウサギ、躍り出る。

ケシゴム 「ええ、本日はご来場いただきまして、ありがとうございます」

ウサギ 「本日は月面旅行会社『フルムーン』にお越しいただき誠にありがとうございます」

ケシゴム 「本日はマシユマロのお買い上げありがとうございます」

ウサギ 「なお、お買い上げのマシユマロは返品が効きませんのであしからず」

ケシゴム 「本日はようこそおいでくださいました、どうぞごゆっくりなさっていただく下さい」

ウサギ 「本当は横にお越しになりましたね、どうぞご優待券をお使いください」

ケシゴム 「すいません、こちらは有効期限が切れております」

ウサギ 「有効期限が切れてしまったマシユマロは、廃棄処分するしかないんですよ」

ケシゴム 「ええ、法律で決まっておりますので仕方ありません」

ウサギ 「それとも、このマシユマロをお召し上がりになりますか？ あまりお勧めは致しませんがよろ

しいですか？」

ケシゴム 「つきましてはおお客様のマシユマロを代金の代わりにいただきます」

ウサギ 「ええ、それはもういっさいがっさいいただきます」

ケシゴム 「頂いたマシユマロはロケットの燃料にさせていただきます」

ウサギ 「月に飛ぶロケットの燃料は皆さんのマシユマロ次第というわけでございます」

ケシゴム 「ですので、皆様には、是非とも良質なマシユマロをお支払いいただければと思います」

ケシゴム & ウサギ 「ちなみに」

ウサギ 「万が一、当方フルムーンにてご用意したマシユマロを召し上がって何らかの不備があった場

合」

ケシゴム 「ご不満文句、あらゆるクレームは、一切受け付けませんのであしからず」

ウサギ 「え？ お名前をお忘れになったって？」

ケシゴム 「そんなこと知りませんよ」

ウサギ 「え？ お生まれをお忘れになったって？」

ケシゴム 「自己責任ってやつですよ」

ウサギ 「え？ ご自分をお忘れになったって？」

ケシゴム 「どいつもこいつも、欲しがりすぎだ」

ウサギ 「え？ 欲しいモノをお忘れになったって？」

ケシゴム & ウサギ 「そいつは、残念でした！！」

ベルの音が鳴り響く。

ケシゴム 「さあ、みんな、お遊戯の時間だよ！」

一同整列し、ダンス。

詩は口々に言い続けている。

ケシゴム & ウサギ、一同の前で同様に踊る。

と、

唐突な沈黙。一同、動きを止める。

が、ケシゴムだけ、ダンスを続けている。

ポコペンとクチナシ。

ポコペン、奇妙な動作。ゆっくりと動いている。

ポコペン 「ねえ」

クチナシ 「何？」

ポコペン 「名前」

クチナシ 「名前？」

ポコペン 「そう」

クチナシ「名前」

ポコペン「きつと」

クチナシ「きつとどこかにあるよ」

ポコペン「ポコペン」

クチナシ「ポコペンは、ポコペンなの？」

ポコペン「(アクション)」

クチナシ「違うよ。クチナシ。お口直しにどうぞ」

ポコペン「違う」

クチナシ「どれ？」

ポコペン「それ」

クチナシ「どれはそれ？」

ポコペン「それはどれ？」

クチナシ「私はクチナシ。お口無し」

ポコペン「違う」

クチナシ「口がないなら、どうすればいいのかな？」

ポコペン「(アクション)」

クチナシ「マシユマロが・・・」

蟹たち、止まったまま。

蟹1 & クチ「夢だ」

蟹2 & クチ「ああ、夢だ」

蟹3 & クチ「確かに夢だ」

クチナシ「夢かな？」

ポコペンを見やる他の蟹たち。

蟹1 & クチ「夢さ」

蟹2 & クチ「夢だ」

蟹3 & クチ「決まってる」

クチナシ「夢じゃない」

蟹1 & クチ「夢ではない」

蟹3 & クチ「夢で無いなら」

蟹たち「何だ？」

クチナシ「思考」

蟹たち「思考？」

クチナシ「モノを考えている」

蟹1 & クチ「何を考えている？」

クチナシ「自身の欲求と思考回路誕生についての原初欲求に関する考察」

蟹2 & クチ「小難しい」

クチナシ「小難しいのではなく、自身にしか理解しえないものが、思考と呼ぶに相応しい」

蟹3 & クチ「よし、思考するでしょう」

蟹たち & クチナシ思考する。

その間、ポコペンはゆっくりと動き続けている。

蟹1 & クチ & ヤマダ 「生まれ」

蟹2 & クチ & アオバ 「誕生に等しき」

蟹3 & クチ & キリ 「拒絶」

クチナシ 「理由は？」

蟹1 & クチ & タカイ 「考察」

蟹2 & クチ & ヤマダ 「不安」

蟹3 & クチ & アオバ 「強迫観念」

クチナシ 「比例する己の至福」

蟹1 & クチ & キリ 「否、行動する自己への懸念」

蟹2 & クチ & タカイ 「あの時」

蟹3 & クチ & ヤマダ 「あの頃」

クチナシ 「その時」

蟹1 & クチ & アオバ 「その頃」

蟹2 & クチ & キリ 「誰か？」

蟹3 & クチ & タカイ 「誰かの中に」

クチナシ 「異なる誰か？」

アオバ 「誰の中に」

キリハラ 「誰の外にも」

ヤマダ 「誰の中は」

クチナシ 「誰の皮」

タカイ 「誰の内臓」

2 「誰の口」

3 「誰の目」

クチナシ 「誰の耳」

1 「誰の鼻」

ポコペン 「大きく足を踏み鳴らす」

ゆっくりとポコペンを見る一同。

クチナシ 「あんたは、ポコペンだよ」

ケシゴム、ダンスを止める。

ポコペン 「(アクション)」

ケシゴム 「何を？」

ポコペン 「思い出せないの」

ケシゴム 「じゃあ、初めからなかったのさ」

ポコペン 「初めからないのか？」

ケシゴム 「そうさ」

ポコペン 「・・・」

ケシゴム 「君が持っているはずがないんだよ」

ポコペン 「なんで？」

ケシゴム 「なんででしょう？」

ポコペン 「全部知ってる？」

ケシゴム「全部知ってるよ。君のお母さんのように」

ポコペン「お母さん？」

ケシゴム「お母さんだよ」

ポコペン「違う・・・」

ケシゴム「何が？」

ポコペン「思い出したいと、思うのだ・・・」

ケシゴム「思い出さなくてもいいと、思うよ」

ポコペン「マシユマロを」

ケシゴム「そうだね」

ポコペン「します」

ケシゴム「好きにすればいい」

クチナシ「ミルクを飲めばいい」

ケシゴム「何？」

クチナシ「ミルクを飲むと、思い出せそうな気がするからです」

ケシゴム「何の話？」

クチナシ「ポコペンの話だよ。おかーさん」

ポコペン、ゆっくりと動い続けている。

ケシゴムとクチナシ、にらみ合う。

ケシゴム「違うよ。ケシゴムさ」

クチナシ「ケシゴムは何を消したの？」

ケシゴム「何も消してない」

クチナシ「それは本当？」

ケシゴム「本当だと思えば」

クチナシ「それは曖昧ね」

ケシゴム「そうさ、曖昧だ」

クチナシ「名前なんて、曖昧なのね」

ケシゴム「思い出さなくてもいいと思うのです」

クチナシ「思う思いを思うのです」

ゴーんゴーんと、ロケットの作業音が聞こえる。

ケシ、クチ、ポコ以外の一同、詩的言語を口ずさみ始める。

クチナシ（ポコ&ケシ）「鼓動が、聞こえる。ドーン、ドーンと、胸を打つ。鼓動が、聞こえる。古くの昔から聞こえているはずの音。でも、どこにあるのかが思い出せない。知っている。知る。知りたいと思う自身を、知る。水の流れる音などせず、私は丸くなっているだけ。離れないのだ。そこいらじゅうに散らばっているモノ。それを知っていたはずなのに、思い出せない。知っていた。知っていたのに、思い出せない。私の顔に張り付いている、顔の、形に私は違和感を感じて・・・ああ、ドアだ。ドアが、あそこにある。あそこにあるドアに触れたら、思い出せるのだろうか。私の・・・」

一同、ポコペンの体にコードを差し込み去る。

残ったケシゴムとクチナシ、互いに見つめあい、去る。

残されるポコペン。

【月面旅行会社フルムーン】

広い場所。おそらく地下。窓がなく、外に続くドアは一箇所のみ。
雑多に広がる物品。舞台中央にロケット（と一同が信じ込んでいる象徴物）が鎮座している。

ぼんやりと佇むポコペン。

そこにやってくるヤマダ。

ポコペンの腕をおもむろに掴み、どこかに去ろうとする。

アオバ、ダッシュで登場。

ヤマダと反対側の腕をつかみ、お互いに引っ張り合う。

ヤマダとアオバ、互いに敵意むき出しである。

なされるがままのポコペン。

しばし、無言の攻防。

ヤマダ 「帰る」

アオバ 「行く」

ヤマダ 「帰らなきゃいけないの」

アオバ 「行かなきゃいけないの」

ヤマダ 「邪魔」

アオバ 「あんただ」

ヤマダ 「邪魔しないで。間に合わない」

アオバ 「発車時刻が決まってるんだ」

ヤマダ 「あんたにはないんでしょう？」

アオバ 「どこにも行けないでしょ？」

ヤマダ 「・・・自由のはき違い」

アオバ 「時間管理の申し子」

ヤマダ 「不自由を制限だととらえている」

アオバ 「自由を知らないことの哀れさよ」

ヤマダ 「定刻発車の時間を知らねば、帰りの道さえまならぬ」

アオバ 「ならぬと決める狭量さ」

ヤマダ 「何？」

アオバ 「料簡が狭いと言っている」

ヤマダ 「あんたなんかに言われたくない」

アオバ 「あんたなんかに言われたくない」

ぎりぎりどポコペンの体を引っ張り合うヤマダとアオバ。

にらみ合う二人。ポコペンは無表情である。

蟹登場。

蟹 1 「唐突に静かになって」 痛い」

蟹 2 「(同じく) 痛いよね」

蟹 3 「痛い痛い」

蟹 1 「痛い痛い痛い」

蟹 2 「痛い痛い痛い痛い」

蟹3 「痛い痛い痛い痛い痛い」
蟹1 「痛い痛い痛い痛い痛い痛い」

痛いと言いつける蟹たち。
ポコペン、横に伸ばされ始める。
それに合わせて絶叫する蟹たち。
そこにクチナシ登場。

クチナシ「いたーい！！！」

ヤマダ&アオバ、驚く。
蟹たち、騒ぐのを止める。

クチナシ「痛いのでやめてくださいーい」
ヤマダ&アオバ「こいつが離さないのが悪いんだ」
クチナシ「あ、仲良しさん」

クチナシ、ふらふらと二人に近づく。

クチナシ「いたいたいーいので、やめてくださいな」
ヤマダ 「またそれ？」
アオバ 「また嘘？」
クチナシ「(ヤマダに) またこれ。(アオバに) 嘘じゃないよ」

ヤマダ、アオバ睨み合ってポコペンの腕を離す。

クチナシ「ありがとーございます」
蟹たち 「ございますー」
クチナシ「(ポコペンに) 痛い痛いの嫌だったねえ？」

ポコペン、ぼんやりとクチナシを見る。

クチナシ「起きないねえ」
蟹1 「起きてる」
蟹2 「そうだ、起きている」
蟹3 「何言ってるんだ」
クチナシ「お休み中だよ」
蟹1 「失礼な。私はこうしてここにいるじゃないか」
クチナシ「君は蟹さん」
蟹2 「そんなことない」
蟹3 「蟹さんは私だ」
クチナシ「ううん。ただの蟹さん。ほら、(振付けて) カニ、カニ」

クチナシ、しばし、カニカニ言いながら、踊る。
それに合わせて蟹たちも踊り始める。

アオバ 「いつまで？」

ヤマダ 「は？」

アオバ 「いつまで？」

ヤマダ 「なにが？」

アオバ 「じゃあ、いい」

ヤマダ 「あ、そ」

アオバ 「・・・」

ヤマダ 「・・・」

アオバ 「わ」

ヤマダ 「(さえぎって) 私は、帰る」

アオバ 「違う」

ヤマダ 「帰るの。必ず」

アオバ 「そんなこと出来ない。わかってるんでしょ？」

ヤマダ 「出来る。そういう約束なもの」

アオバ 「守らない」

ヤマダ 「そんなのどうだっていい」

アオバ 「はあ？」

ヤマダ 「私は帰る私と」

アオバ 「絶対に無理だって言い切ってあげる」

ヤマダ 「切れるものなら切ってみろ」

アオバ 「紙に書かれた嘘八百に真の味などありはしない」

ヤマダ 「どうしてあんたにわかるのかしら？」

アオバ 「わかってそれがわからない？」

ヤマダ 「わかるわからぬ話じゃないの」

アオバ 「ならば、なんだ？」

ヤマダ 「するかしないかの話なの」

アオバ 「何をする？」

蟹たち 「ちょうだい」

ヤマダ 「ちょうだい」

アオバ 「・・・ちょうだい」

ヤマダ 「ちょうだい」

アオバ&蟹 「ちょうだい」

ヤマダ ☆「ねえねえ、ジョンブリアンって知ってる？ ジョンブリ、ジョオオンブリイ。☆良いよね。すごくいいと思うの私。わかる？ ☆あ、たっくんだ。覚えてる？ 私、私、先月で有限

会社になりました、缶コーヒーの三角形です。よろしくお願いしまーす。☆ホント考えてみればさ、卒業以来だよ。覚えてる？ 洗濯ばさみ。あれでさあよく捻ったよねえ。捻りすぎて大変だったからさ。あんまりにも自転車早かったら、私、二足歩行になるしかなかったんだよ？ ☆山と積まれた電球給食。食の文化は万里を超えて、超えた先には何もなくて、桃源郷の男の顔に、ちよび髭ちよいちよい生えている。☆しかし、そのちよび髭はなんと日々の生活に疲れているのだった！ ☆疲れ疲れてたどり着く、都会のオアシスここはどこ？」

言いながら動きまわすアオバ。

アオバ ☆「ヤマダさん。可愛いねえ。いくつになったのかな？」

ヤマダ 「34」

アオバ ☆「そっか！ もうそんなにおっきいんだ！ じゃあ、縫い付けなきゃね」

ヤマダ 「え、どこを？」

アオバ ☆「あんまりおっきくなっちゃうと、縫い付けるのも一苦勞。お姉さん、困っちゃうんだから！」

ヤマダ 「そっか、大変だ」

アオバ ☆「そうよ！ 大変とはどの辺のことなんだろうね？ 大きな辺ってどこにあるんだろう？

ここらへん？ でも、お姉さんのこの辺は太陽光ヒーターになってるから、そんなに大変じゃないんだよ？」

ヤマダ 「ヒーターになってるんだ」

アオバ ☆「違うよ。ひよつとしたら冷房かもしれないよ」

ヤマダ 「水陸両用みたいだね」

アオバ ☆「そうだよ！ 水陸両用なんだよ？ 私はアーミー！！ かつこいいでしょう？」

ヤマダ 「そうだね・・・」

アオバ ☆「右向いて左向いて、あっちへどーん！！」

ヤマダ 「・・・」

アオバ ☆「腐った山のふざけた山椒魚がげらげらと笑っているのです」

ヤマダ ☆「・・・その山椒を振りかけて、餅の一つでも食べましょう」

アオバ ☆「突き立てていたて突っ込んで」

ヤマダ ☆「つかかけサンダルひっかけて」

アオバ ☆「明日の夜空に羽ばたこう」

ヤマダ ☆「売女と暴いたあばらの家の胸に開いた一輪の」

アオバ ☆「ラ・フ・レ・シ・ア！」

ヤマダ ☆「ふやけてふやふやふやふや」

アオバ ☆「フオークダンスもそこそこに、荒唐無稽の通勤電車」

ヤマダ ☆「通勤急行乗り過ごし、次はく、公団団地前く、公団団地前く、お降りの方は肩関節を外すこと

とができるなら、痛い！！」

クチナシ、アオバとヤマダの中に入ってくる。

クチナシ 「(楽し気) ♪ねんころねんころお年頃」

アオバ ☆「青春駆け抜け七五三。幼少時代を素っ飛ばし、中学小学大学生」

ヤマダ ☆「学生時代の思い出と婚活活動あくせくと働きはたいて出る埃」

クチナシ 「誇った鉾の矛先にトンと佇む灯台キラリ」

アオバ ☆「東大受験に受動的。的屋のあんちゃん、家なき子？」

ヤマダ ☆「航行出発ふねの旅。水面直立電波を受信。熟考重ねるロダンの中に、実はひとりの隠し子

隠し」

クチナシ 「困ったかつこの言葉の割り振り。振って振られる賽の目は」

アオバ ☆「今日もさっぱりピンゾロの赤いお目の酒呑の童子」

ヤマダ ☆「わ・ら・べ、の歌を聞いたかお前？」

クチナシ 「おい、その兄ちゃん、おれっちのこぶしをちょいと聞いて行かないかい？ なあに、損はさ

せねえよ、十八番つてのは、こういう時のためにあるんだからな」

三人 「♪お宝隠した内閣の、

攻める外角豪速球。

速球側溝落ちた溝。

溝たる溝のアイデンティティ、

探して見つかるものじゃなし、
梨食う客の姿も見えぬ、
見えぬのならば、碎いてしまおうバナナの皮を。
川の流れにさらさらと、さらう男の背を追って。
追いはぎつぎはぎおはぎの味は、
道産子定例介護の管理。
間食ポテトの暇つぶし、
つぶしてひらいてああ楽しい！！」

三人の騒ぎの間、キリハラとタカイ登場。
タカイにナイフを向けているキリハラ。
蟹たち、タカイとキリハラの傍に。
出来るなら、ここまでのやり取りと、この後のやり取りが同時。

蟹 1 「誰だ？」
蟹 2 「誰だお前？」
蟹 3 「匂い」
蟹 1 「味」
蟹 2 「知らないやつだ」
蟹 3 「知ってるやつなんているのか？」
蟹 1 「いるに決まってるだろ？」
蟹 2 「本当に？」
蟹 3 「何？ 信じてないの？」
蟹 1 「いやあ、そういうわけじゃないけどさ」
蟹 2 「いいや、君はいつもそうだ。私をバカにした顔で見るんだな」
蟹 3 「そんなことないさ。君のことはそれなりに尊敬しているよ」
蟹 1 「それなり、とはどういうものかね？」
蟹 2 「それはそれとなくさりとしているモノさ」
蟹 3 「ふん、わざとらしいものだ」
蟹 1 「まあまあ、ここはひとつ、この顔を立てておくれよ」
蟹 2 「どの顔を立てるんだい？」
蟹 ♡ 「三番目の顔だよ」
蟹 1 「どっちから見ても？」
蟹 2 「二丁目の角から」
蟹 3 「だとすると、それはタバコ屋の角のことを言っているのかい？」
蟹 1 「いやいや、シママラの角のことだよ」
蟹 2 「島谷さんじゃなかったか？」
蟹 3 「七輪でサンマを焼いていたよ」
蟹 1 「サンマか？」
蟹 2 「めざしでもいいけど？」

好き勝手に喋っている蟹たち。
混沌の状況。
突然、

キリハラ「(怒鳴る)俺を見るな!!!」

一斉にキリハラを見る一同。
沈黙。

キリハラ、言葉が続けようとするところで、また好き勝手に喋り始める一同。

キリハラ「おい！」

再び、キリハラを見る一同。

キリハラ「俺を見るな!!」

再び、しゃべり始める一同。

キリハラ、言葉がうまくいかないことに苛立つ。

キリハラ「ああ、もう、だから!!」

クチナシ「(唐突に)誰え？」

キリハラ「(やや驚く)あ」

クチナシ「誰さんですかあ？」

キリハラ「ぼ、僕は・・・」

クチナシ「みんなあ！ お客さんだよお!!」

一斉にキリハラの元にたかってくる一同。

※注意・蟹はキリハラ&タカイに触れないこと。

クチナシ「みんなく、練習通りやるんだよう、せくの」

一同「いらっしやいませ」

キリハラ「あ・・・」

一同「ようこそいらっしやいました！ 月面旅行会社フルムーンへ！」

キリハラ「旅行・・・？」

一同「フルムーンはお客様の快適な月面旅行計画のお手伝いをさせていただいております！」

キリハラ「月面・・・？」

一同「当旅行会社はその主な旅行先として、夜空に浮かぶまん丸のお月様への旅を斡旋しております！」

キリハラ「嘘だ」

クチナシ「嘘じゃないよお」

キリハラ「(タカイにナイフを突きつけ)俺を見るな!!」

クチナシ「はーい！ わかりましたあ」

クチナシ、アオバ、ヤマダ、キリハラから背を向ける。
蟹たちはキリハラ、タカイをまじまじと見ている。

キリハラ「(いらだち気に)そうだ！ それであつてる！ そうして、俺を見るんじゃない！」

キリハラ、結構必死だが、三人とも見ない。

キリハラ「おい！ みんなこっちを見るな！ こいつはどうにもならないぞ！」

キリハラのことを誰も見ない。

キリハラ、悔しげな顔をしながら、舞台を横切ろうとする。
と、ポコペンと目が合う。

蟹1 「嘘つきだ」

蟹2 「こいつは嘘つきだ」

蟹3 「正直者だった奴だ」

蟹1 「でも今は嘘つきだ」

蟹2 「ああ、嘘つきになってしまった」

蟹3 「嘘をつけ、嘘つきのくせに」

蟹1 「嘘つきは正直者にはもうなれない」

蟹2 「何しに来たんだ？」

蟹3 「問うてみよう」

蟹1 「聞いてみよう」

蟹2 「尋ねてみよう」

ポコペン、キリハラに近づき、触れようとする。

蟹たち、何かの気配を感じ、ばっと、一点を見つめる。
ベルの音が突然鳴り響く。

『マシュマロの時間』

ケシゴム「みんな！ ご飯の時間だよ！！」

ケシゴム、踊りながら登場。

整列するクチナシ、ヤマダ、アオバ。

ポコペン、キリハラの前にいるが、整列させられる。

蟹たち踊り始める。

ジャンキーたちも踊り始める。

ウサギ、マシュマロの入った瓶を取り出し、ケシゴムに手渡す。

ケシゴム、マシュマロを周囲にばらまく。

それに一斉に群がる、クチナシ、ヤマダ、アオバ。

蟹たち、ポコペンにマシュマロを食べさせる。

啞然としているキリハラ&タカイ。

マシュマロを食べ終わり、クチナシ、アオバ、ヤマダ、去る。

静かになる空間。

呆然としているキリハラ&タカイ。

もそもそとマシュマロを食べさせられているポコペン。

ケシゴム「ポコペン」 いっぱい食べるんだよお」

蟹1 「（ポコペンに食べさせながら）食べてる」

蟹2 「うん、食べてる」

蟹3 「たらふく食べてる」

ケシゴム 「うん。いい子だ」

蟹1 「おなかがすいた」

ケシゴム 「うん？」

蟹2 「おなかがすいたのです」

ケシゴム 「食べてるじゃない」

蟹3 「もっと食べたいのです」

ケシゴム 「欲しがりさんだ」

蟹1 「もっとちょうだい」

ケシゴム 「ダメ。今日の分はそれでおしまい」

蟹2 「足りないの」

ケシゴム 「ダメダメ、あんまり食べるとおなかを壊すよ」

蟹3 「壊れないよ」

ケシゴム 「わからないよ」

蟹1 「ちょうだいよ」

ケシゴム 「我慢しなさいな」

蟹2 「いや、もっと食べたい」

ケシゴム 「ダメだって」

蟹3 「なんで？」

ケシゴム 「そうだよ。お前は食べるためにいるんだ」

蟹1 「貯めるためにいるの」

ケシゴム 「そうさ、食べて貯めるんだ」

蟹2 「じゃあ、もっとちょうだい！」

蟹3 「もっとちょうだい！」

蟹1 「まだ足りないの！」

蟹たち 「ちょうだい！！」

ケシゴム、ポコペンに平手打ち。

吹っ飛ぶ蟹たち。

ポコペンが無表情に見下ろすケシゴム。

無言でにらみ合う二人。

と、急にポコペンの頭をなでるケシゴム。

ケシゴム 「優しく」 我慢しなさい」

ポコペン、ぺたんと座る

蟹たちも、それにならう。

ケシゴム 「(キリハラに) キリハラさんだ」

キリハラ 「！」

ケシゴム 「誰？ それ？」

キリハラ 「こいつを見るな！」

スタスタとタカイに近づくケシゴム。

ケシゴム 「誰？ 君？」

タカイ 「・・・タカイです。タカイ久美子」

ケシゴム 「久美子ちゃん」

タカイ 「はい」

ケシゴム 「初めまして。かわいいね。よく言われるでしょ？ あ、でも、好みが分かれるかな？ どっちかっていうと、万人受けする感じじゃないもんね。隙間、みたいだ。隙間産業。ね？ わかる？」

タカイ 「いえ」

ケシゴム 「わかんないかあ。難しいなあ。でも、可愛いと思うよ。うん。私は可愛いと思う。うん。可愛い。可愛い」

キリハラ 「おい」

ケシゴム 「でもさ、惜しい、って感じもするよね」

キリハラ 「おい！」

ケシゴム 「惜しいと、美味しいって似てると思わない？ なんていうか、こう、語感が。互換がきくところさ、とて美味しいと思うんだ。惜しい美味しい。ね？」

タカイ 「はあ・・・」

キリハラ 「おい！！」

ケシゴム 「(タカイを見つめたまま) 何？ キリハラさん」

キリハラ 「本当の俺を返すな！」

ケシゴム 「はあ」

キリハラ 「俺はどこだ！？」

ケシゴム 「ここに」

ケシゴム、懷からマシユマロを取り出す。

キリハラ、それに飛びつくがケシゴム、平然とよける。

ケシゴム 「お客様、これはもう当店の商品でございます」

キリハラ 「それは俺だ！」

ケシゴム 「違うよ。キリハラさん、それは違う。これはもうあんたじゃない」

キリハラ 「返すな！」

ケシゴム 「かしこまりました、お客様、これは当店の財産として大事に扱わせていただきます」

キリハラ 「こんなことになるんじゃないかって思ってた！」

ケシゴム 「そんなの知らないよ。自己責任だし、リコールは効かないって言ったよね？」

キリハラ 「こんな、こんなことに・・・」

ケシゴム 「なるんじゃないかって思ってたあ？」

キリハラ 「！」

キリハラ、怒って、ケシゴムにナイフを振り回す。

ケシゴム 「あはは。そんなに怒らないでよ。お望み通りでしょ？」

キリハラ 「そうだ！」

ケシゴム 「何が不満？」

キリハラ 「全部嘘になった」

ケシゴム 「そうだよ。そりゃあそうさ。あんたは正直者だったんだ。正直者が正直者を差し出したんだから、そりゃあ嘘つきになるよね？」

キリハラ 「喋る言葉の全部が嘘だ」

ケシゴム 「よかったじゃない。なりたいたいものになれる人間なんてそうはいないんだよ？ 贅沢言わない」

キリハラ「(悔しそう)・・・」

ケシゴム「こんなことなら食べなきゃよかった？ それはちよつと都合がすぎでしょ？ 食べてみないとわからない。せつかなんだから口に入れなきゃ。甘いのかあ酸っぱいのか。それでこそ楽しみでしょ？」

タカイ「あ・・・」

ケシゴム「なあに？ 久美子ちゃん」

タカイ「返してくれませんか？」

ケシゴム「うん。それは難しいんだよ」

タカイ「この人、こんなになっちゃって、いろいろ大変なんです」

ケシゴム「そっかあ、大変なのかあ」

タカイ「仕事も辞めなきゃいけなくなつて、親御さんからも縁を切るつて」

ケシゴム「(大げさに)それは大変だあ」

タカイ「だから」

ケシゴム「久美子ちゃん」

タカイ「・・・」

ケシゴム「キリハラさんの何？」

タカイ「婚約者です」

ケシゴム「へえ。じゃあ、キリハラさんが大切だ」

タカイ「はい。大切です。とても」

ケシゴム「大切です。とても」

タカイ「・・・」

ケシゴム「(にやりと笑つて)その嘘、ホント？」

タカイ「え？」

ケシゴム「(にやにやしながら)まあ、いいや。キリハラさん。こうしようよ」

キリハラ「・・・」

ケシゴム「久美子ちゃんからマシユマロをもらう」

キリハラ「それは良いな！」

ケシゴム「なんで？ 交換条件としては妥当じゃない？」

キリハラ「久美子を巻き込んでも構わない」

ケシゴム「それは嘘。だって、ここに連れてきたのはキリハラさんじゃない」

キリハラ「それは・・・」

タカイ「私は構いません」

キリハラ「久美子」

ケシゴム「さすが、久美子ちゃん。いい子だねえ」

タカイ「この人に、もとに戻つてもらいたいから」

キリハラ「久美子」

タカイ「あなたは、正直者の方が魅力的だから」

ケシゴム「その嘘、ホント？」

タカイ「！」

ケシゴム「(にやにや)まあ、いいや。じゃあ、商談成立つてことで、いいのかな？」

キリハラ「・・・いいよ」

ケシゴム「(呆れて)キリハラさあん」

キリハラ「いいよ。それでいいに決まつてる。俺は彼女を巻き込んでいない。だから、俺には責任はない。だから勝手にすればいい。俺は何も支払わない」

ケシゴム「でもなあ、キリハラさんの魅力は確かに正直者だけど、それはもうもらっちゃったし」

キリハラ「記憶でも年齢でも、性格でも好きなものを持って行くな！！だから、久美子だけは放っておきな！」

ケシゴム「そう？ そっかあ。そう言うなら、しょうがないね」

背後からヤマダとクチナシ。

キリハラにいきなり飛びつく。

キリハラ「！」

ケシゴム「連れて行つて」

クチナシ「はゝい」

キリハラ「ちよつと、おい！ 久美子！！」

キリハラ、連行される。

取り残されるケシゴム&タカイ。

タカイ「あの・・・」

ケシゴム「うん。残念だけど、しょうがないよねえ」

タカイ「あの、私は・・・」

ケシゴム「とりあえず、お茶でもどう？」

ケシゴム、タカイを連れて去る。

コーン、カーンと、何かの建設音が響く……
ウサギが一人、何かを作っているような動作。
そこに、ポコペン登場。
建設音に、突然異音、はつとするポコペン。
サイレンの音、警告音。
方々から、蟹たちの声。
ポコペン、ウサギを立ち止まって見やる。
ポコペンのセリフは声に出ない。

ポコペン「何を作っているの？」

「ロケットに決まっている」

ポコペン「もう、長いこと作っているのね」

蟹2 「長いこと作っているんだ」

ポコペン「いつできるの？」

蟹3 「何度も出来たよ」

ポコペン「本当に飛べるの？」

蟹 1 「何度も飛んだよ」

ポコペン「何度も？」

蟹2 「そう、何でも」

ポコペン「誰が飛ぶの」

蟹3 「そんなことは決まっている」

ポコペン「誰が乗るの？」

蟹 1 「そんなことは、決まっているんだよ」

蟹1 「発射実験第一段階」

蟹 2 「機関部に異常発生により成功せず」

蟹1 「発射実験第二段階」

蟹3 「居住区の気密不十分により失敗」

蟹1 「発射実験第三段階」

「コックピット内に動作不良。失敗」

「発射実験最終段階」

蟹3 「総重量過多により、機体の全面改修が必要と判断」

蟹たち「発射実験。発射実験。乗組員は直ちに準備せよ。繰り返す。乗組員は直ちに準備せよ。これは、

実験である。その為、貴君らの命は保証しない。しかし、この実験によって、栄光の成功が近

づくのだ。飛び立つために、我々はその代償払わなければならない。代償を払わなければならない

ない。代償を払わなければならない。代償を払わなければならない。代償を払わなければならない。

ない。代償を払わなければならない。代償を払わなければならない。代償を払わなければならない。

ない。代償を払わなければならない（繰り返し）」

声はだんだんと小さくなっていく。

ポコペン「(ねえ、何を作っているの?)」

蟹 1 「何度でも作るんだよ」

ポコペン「もう、長いこと作っているのね」

蟹1&2 「何度でも作るんだよ」
ポコペン 「(いつできるの?)」
蟹3 「何度でも作るんだよ」
ポコペン 「(本当に飛べるの?)」
蟹1&3 「何度でも作るんだよ」
ポコペン 「(誰が飛ぶの?)」
蟹2&3 「何度でも作るんだよ」
ポコペン 「(誰が乗るの?)」
蟹たち 「そんなことは決まっている」

クチナシ 「ねえ」

クチナシ登場。

クチナシ 「そんなこと、どうでもいいんだよ」
ポコペン 「このロケットは何を載せるの?」
クチナシ 「マシユマロ」
ポコペン 「マシユマロ」
クチナシ 「マシユマロが燃料になってお月様に飛ぶんだよ」
ポコペン 「マシユマロ」
クチナシ 「それはみんなだよ」
ポコペン 「みんな」
クチナシ 「そう、みんな。私の中にある、みんな。みんなの中にある、みんな」
ポコペン 「私はみんな?」
クチナシ 「そうだよ。みんななんだよ」
ポコペン 「私は私という私を持っていない」
クチナシ 「それは本当?」
ポコペン 「それは本当」
クチナシ 「いっぱい食べたんだ」
ポコペン 「いつも食べているの」
クチナシ 「消されてしまった」
ポコペン 「何を?」
クチナシ 「本当のモノ」
ポコペン 「本当なんてない。最初から」
クチナシ 「最初にはあったの」
ポコペン 「本当?」
クチナシ 「本当。でも、いっぱい食べたから消えてしまった。ううん。あいつがどっかにやってしまった」
ポコペン 「ねえ、ロケットは飛ぶの?」
クチナシ 「ポコペン。一人でポコペンをするのね。一人でポコペンをしているのね。♪ポコペンポコペン
だくれがつつついた、ポコペン」
ポコペン 「ポコペンは」
クチナシ 「振り返って、背中をつついてるのはみんなだと思う?」

クチナシ、まっすぐにポコペンを指さす。

クチナシ「鼓動が、聞こえる。ドーン、ドーンと、胸を打つ」

ポコペン「鼓動が、聞こえる。古くの昔から聞こえているはずの音」

クチナシ「なのに、忘れてしまつて、どこにあるのかが思い出せない」

ポコペン「知っている。知る。知りたいと思う自分自身を、知る」

クチナシ「ポコペンは丸くなっているだけなのに、そのことだけがしこうかいろ、から、離れないのだ」

ポコ&クチ「ポコペンは、本当。バラバラになった嘘。本当がそこいら中に散らばっているのを、知って

いるのに、思い出せないから、思い出したいのだ。顔に張り付いている、顔の、形に不快感を感じ、気色の悪さを覚え、吐き気すら感じ、ああ、ドアだ。ドアが、あそこにある。あそこにあるドアに触れたら、思い出せるのだろうか」

ポコペン「ほしものは？」

クチナシ「欲しものは？」

ポコペン「ない」

クチナシ「嘘。それは嘘なの？」

ポコペン「嘘なんかついてない」

クチナシ「嘘を嘘と知らないのは、本当を知らないから嘘になつてしまふんだよ」

ポコペン「本當って？」

クチナシ「違ふよ。本當に欲しいものは何？つて聞かないと」

ポコペン「ほしのかな？」

クチナシ「欲しいものがないのに欲しいものを欲しいと思う？」

ポコペン「欲しいの？」

クチナシ「わかんない。けど、持つてきてあげるよ」

ポコペン「欲しいもの？」

クチナシ「違ふよ。素直に欲しいと言つてもいい人」

ポコペン「欲しいものなんて」

クチナシ「それは嘘になる」

ポコペン「なる？それは私じゃなくなるってこと？」

クチナシ「不在でしょ？」

ポコペン「私？」

クチナシ「ピンポーン。あれえ？ 誰もいませんねえ。ポコペン。何にも知らないポコペン。でも、知り

たいと思うポコペン。何でも知りたいポコペン。私がないから私は私を探さないんだよ」

ポコペン「何を知ってるの？」

クチナシ「知ってる」

ポコペン「役目？」

クチナシ「クチナシの役目はなんでしょう？」

ポコペン「・・・」

クチナシ「（ポコペンに向き直つて）言わない、言えない。クチナシだもの。お口無し」

ポコペン「・・・」

クチナシ「お口直しにミルクでもお持ちしましょう」

ポコペン「ミルク？」

クチナシ「お持ちするんじゃないかった」

ポコペン「なんのこと？」

クチナシ「ミルクの話だよ」

ポコペン「？？？」

クチナシ「本當に美味しいモノを食べなきゃダメなんですよ」

クチナシ、去る。
ポコペン、それを呼び止める。

クチナシ「忘れてた」
ポコペン「え？」
クチナシ「これ夢だから」

その場に崩れるポコペン。
ウサギ、作業を続けている。
ケシゴム、タカイを伴ってバルコニーから登場。

ケシゴム「そうそう。久美子ちゃんは頭がいい」

タカイ「ということは」

ケシゴム「人格ともいえるね」

タカイ「記憶じゃないの？」

ケシゴム「そうとも言うよ。思い出、感情、性格、性分、出身地から血液型まで。なんだって抜き取れる」

タカイ「・・・マシユマロ？」

ケシゴム「そう」

タカイ「あの人は」

ケシゴム「嘘つきになりたいって言ってやってきた」

タカイ「そんな」

ケシゴム「100%の正直者は100%の嘘つきになっちゃった」

タカイ「どうにもならないの？」

ケシゴム「どうにかしたいの？」

タカイ「あの人は大切」

ケシゴム「大切。かあ。(にやにやと笑う)」

タカイ「・・・何？」

ケシゴム「いやあ」

タカイをまじまじと見つめるケシゴム。

タカイ「何？」

ケシゴム「別に」

タカイ「(話題をそらすように) マシユマロを集めてどうするの？」

ケシゴム「燃料になる」

タカイ「燃料？」

ケシゴム「ゴーン、ゴーン」

作業の音が大きく響く。
タカイ、周囲を見渡す。

タカイ「・・・何？」

ケシゴム「ロケットを作ってる」

タカイ「ロケット？」

ケシゴム「月まで飛んでいくロケットを作っている」

タカイ 「・・・嘘」

ケシゴム 「ハハハ！！ 嘘じゃないよ、久美子ちゃん。みんな最初は信じない。信じてないって言っても、みんな口ケットを抛り所にしてる」

タカイ 「月に行って何をするの？」

ケシゴム 「大げさに首を振る」それは目的じゃないんだよ」

タカイ 「・・・？ 何のために作ってるの？」

ケシゴム 「ふふふ。行ってみたいと思わない？ 安く済ませてあげるよ」

タカイ 「・・・結構です。それよりもあの人・・・」

ケシゴム 「きつと楽しいよ。それに、とても素敵な気持ちになれる。信じてみてよ。知らないものを信じることも大切なことだ」

タカイ 「・・・マシユマロ」

ケシゴム 「嬉しそう」そうだよ！ 今日日、信じることにさえ代金は必要だから。頭がいい。久美子ちゃんは本当に頭がいいね！ 大好きだよ」

タカイ 「ありがとう」

ケシゴム 「ふふふ。久美子ちゃんも信じてみればいいよ」

ゴーンゴーンと作業音が響く。

見つめあう二人。

と、突然、バルコニーから大量の紙切れが投げ捨てられる。

アオバ 「ばっかじゃねーの！？」

ケシゴム 「(うんざりして) アオバ」

アオバ 「それが設計図！？ そんなの子どもでも書ける！！ みんなこいつに騙されてるんだ！」

ケシゴム 「アオバ」

アオバ 「みんな騙されてる。あんたも騙されてる！ 嘘さ。全部嘘！ いっさいがっさい全部嘘、みんなそいつの言うこと真に受けて！」

ケシゴム 「(タカイに) ちよつと待ってて。アオバ」

アオバ 「いいか！？ 私はこんなところから絶対に逃げ出してやる！」

ケシゴム 「ポコペンと？」

アオバ 「そうだ！ ポコペンは私なんだ！ 私は私と一緒にこんなところから出て行くんだ！！」

ケシゴム 「・・・アオバはさ」

アオバ 「あん？」

ケシゴム 「どこに行くのさ？」

アオバ 「外に決まってる！」

ケシゴム 「外なんて本当にあったのかな？ 試してみれば？ 鍵はかけちやいない」

アオバ 「・・・」

ケシゴム 「アオバ。考えてみよう。外とはどこのことなのか？ この建物の外？ ドアの向こう？ でも、ドアの向こうに外なんてあるのかな？」

アオバ ☆ 「天下無敵の電子ジャー」(あるにきまつてる)

ケシゴム 「アオバはどこからやってきたのだろう？」

アオバ ☆ 「外から破って内側に、打ち寄せ波寄せ外に出る！」(この場所の外からに決まってる！ 私は絶対外に出る！)

ケシゴム 「外から？ 外とはどこのことだろう？ ドアの外？ でもアオバはずーっとここにいるよね？ じゃあアオバはここで生まれたのかな？ じゃあ、私は君の親つてことになるのかな？」

アオバ ☆ 「五月蠅！！！！」(うるさい！！！！)

ケシゴム「嫌なこと言われたからってすぐに怒らない」

アオバ ☆「違う！ 丸々太った資格の列はターンテーブルじゃない！！」(違う！ お前が親だんてありえないだろ！)

ケシゴム「違う？ じゃあ、誰が親なんだろう？ ヤマダ？ クチナシ？ そんなことない。じゃあ、私がアオバの親つてことでもいいかな？」

アオバ ☆「適当な歌うたい！ シンガーソングライターの溢れる傲慢チキ！」(いつも適当なことばかり！ そうやって、いつもいつも！)

ケシゴム「適当、なんて、誰が決められる？ 私の言っていることが嘘だなんて、誰にわかる？」

ケシゴム、足元の紙切れを手に取る。

ケシゴム「わからないかな？ その言い分は今のお前と変わらないんだよ？ この紙切れと一緒に。子供の落書きそっくりだ。アオバ、誰にもわからない。ドアの外には何にもない。それが嘘だったとして、お前にそれを確かめる勇氣はないよ。絶対にね」

アオバ 「そんなこと・・・」

ケシゴム「確かめる勇氣はない」

アオバ、黙ってしまふ。

ケシゴム「キリハラさんは？」

アオバ 「・・・」

ケシゴム「キリハラさんは？」

アオバ ☆「嘆願地方の屋根の下！ 公務執行妨害で逮捕しかかった私は、この世のすべての上でスリッブストリームをする！ 絶対に逃げ出してやるんだ！！ ポコペンと一緒に！！」

アオバ、紙をケシゴムに投げつけて去る

ケシゴム「可愛いでしょ？」

タカイ 「信じてないみたいだけど？」

ケシゴム「口だけ口だけ」

ヤマダ 「みんな信じてる」

ヤマダ登場。なぜか服がボロボロ。

ヤマダ、ポコペンの近くに歩み寄り、ポコペンを撫でる。

ケシゴム「どうしたの？」

ヤマダ ☆「苦笑列席ごみのくず」(暴れた)

ケシゴム「往生際が悪いなあ」

タカイ 「(ハッとして) 何したの？」

ヤマダ ☆「カエルがぴよこぴよこ」(してるの)

ケシゴム「だって、何取ってもいいって言ったから」

タカイ 「ちよっと」

ケシゴム「なんにも悪いことしてないよ。キリハラさんが自分で言ったんだ」

タカイ 「マシユマロ？」

ヤマダ ☆「マシユマロン」

タカイ 「(驚く)」

ヤマダ ☆「(ポコペンを撫でつつ) 月面旅行のおやつは、東京タワー？」(この子は月に行くのよ?)

タカイ 「やめて」

ケシゴム 「なんで? やめないよ。だって、キリハラさんは進んで差し出した。自分を。だったら全部抜き取ってあげないと失礼でしょ? それとも」

ケシゴム、にやりとタカイに近寄る。

ケシゴム 「久美子ちゃんは、何をくれるの?」

ゴーンゴーンと、作業音が響く。

タカイにじり寄るケシゴム。

蟹たち登場。蟹歩きをしながら、ぐるぐる回る。

ケシゴム 「ねえ、久美子ちゃんは何になりたい?」

蟹1 「大きくなったら何になりたい?」

ヤマダ 「私は、ポコペンになりたい」

蟹2 「なりたいものはなんだろう?」

ケシゴム 「久美子ちゃんは可愛い名前だね」

蟹3 「きつとなれるさ」

タカイ 「私は、あの人を・・・」

蟹1 「遠くの日に見た夢見た日々は」

ケシゴム 「嘘つきは素敵さ」

蟹2 「近づくまではやはり夢」

ヤマダ 「私はポコペンだ」

ケシゴム 「最近はまがい物の嘘ばかりが出回っちゃって」

蟹3 「近づき触れてようやく気付く」

ヤマダ 「すぐにばれる嘘ばかり」

ケシゴム 「その方が愛嬌があるよね」

ヤマダ 「全部嘘なんて、まるで夢みたいだ」

蟹1 & ケシ 「それは私の夢でなく」

蟹2 & ヤマダ 「誰かの抱いた夢の夢」

蟹3 & ケシ 「三番煎じに味などなくて」

蟹1 & ヤマダ 「出がらし枯らした夢の果て」

蟹2 & ケシ 「ホントかウソかはどうでもよくて」

蟹3 & ヤマダ 「はやりの夢に乗っただけ」

蟹1 & ケシ 「一番二番はどこ行った?」

蟹2 & ヤマダ 「そんなの知らない私の夢は」

蟹3 & ケシ 「ここにはないと気づいたときにや」

ケシゴム 「もう、遅いんだよ? 久美子ちゃん」

タカイ、逃げる。それを追ってケシゴムも去る。

ヤマダ 「私は、ポコペンだ」

蟹1 「そうやって、思い込む」

ヤマダ 「ロケットに乗って飛ぶんだ」

蟹2 「月に行くのね」

ヤマダ 「私は私の中に」

蟹3 「ちようだい」

ヤマダ 「ええ」

ヤマダ、懷からマシユマロを取り出し、ポコペンに食べさせる。

蟹1 「ちようだい」

蟹2 「ちようだい」

蟹3 「ちようだい」

ヤマダ 「あげる。いくらでもあげる。いくらでも、私を」

ヤマダ、たくさんのマシユマロをポコペンに与える。

ヤマダ 「私。私を載せてロケットが飛ぶ」

蟹1 「私はヤマダ？」

ヤマダ 「そう。あなたはヤマダ」

蟹2 「じゃあ、一緒に行くの？」

ヤマダ 「いいえ。あなたは一人で乗るの」

蟹3 「あなたは行かないの？」

ヤマダ 「私はいけない」

蟹1 「なぜ？」

ヤマダ 「ロケットにはあなたしか乗れない」

蟹2 「なぜ？」

ヤマダ 「ロケットにはあなたしか乗れない」

蟹3 「なぜ？」

ヤマダ 「もう、何もないもの」

蟹1 「くれたの？」

ヤマダ 「そう。あげたの」

蟹2 「私はヤマダ？」

ヤマダ 「ヤマダ花子」

蟹3 「ヤマダ花子だった」

ヤマダ 「私はヤマダ花子だった。もう、ヤマダ花子ではなく、それは単なる名前でしかなく、私はポコペンになり、つまり、あなたは私であり、私はロケットに乗って月に行くの。でなければ・・・」

クチナシ 「うるさ〜いの〜」

クチナシ、手にマシユマロの瓶詰を持って登場。
蟹たち、クチナシにたかる。

蟹1 「ちようだい」

蟹2 「ちようだい」

蟹3 「ちようだい」

クチナシ 「蟹たちに向かつて」しっしっ」

ヤマダ☆ 「東名高速星三つ」(何よ?)

クチナシ「妙な英才教育だねえ」

ヤマダ☆「ポコペンを抱きしめて」虫よけスプレー」（邪魔しないで）

クチナシ「そんな混ざりものあげないで」

ヤマダ☆「はじけ飛ぶ備長炭。この子は私」（うるさい。この子は私なんだ）

クチナシ「そう思ってるのはヤマダだけじゃないの」

ヤマダ☆「・・・逆襲のちやぶ台返しは実はおかしみのパンティであつた」（・・・そうやって、あんたも邪魔するの？）

クチナシ「自分の信じているモノが本当かどうかなんて、きつと、最後までわからないよ」
ヤマダ☆「嘆願書類？」（どういうこと？）

クチナシ「空っぽのお胸におててをあてて、よく考えてみましょう」

突然、アオバ登場。

警戒するヤマダ。

アオバ☆「食う退路」（どいて）

ヤマダ☆「面前希望」（嫌）

アオバ☆「どかねば切り捨てる」

ヤマダ☆「捨ててもどこへも行くわけもなく」

アオバ☆「幾年月の年恰好」

ヤマダ☆「空に浮かぶはお月様」

アオバ☆「ハハハ。ゴンルゴンゾーラが呼んでいる。苦笑。微笑。つけまつげが二三歩進んで笑っているよ」（みんな、そればかりだ。みんなそれしか言わない。ねえ）

ヤマダ☆「お空に浮かんだお月様。ポコペンと伴い大気圏。突破口の切り抜きになるなら、幸せでしょう？」

アオバ「好きにすればいい」

アオバ、フラフラと去ろうとする。

クチナシ「どこ行くの？ 外？」

アオバ☆「米印の墓場？」（お前は信じてるの？）

クチナシ「（ロケットの真似）ずどくん？」

アオバ「・・・おなかすいた」

クチナシ「食べる？」

クチナシ、マシユマロを差し出す。

蟹たち、たかってくる。

蟹1「ちようだい」

蟹2「ちようだい」

蟹3「ちようだい」

クチナシ「我慢しなさい！！」

アオバ「要らない」

クチナシ「そう？ おいしいのに」

アオバ「甘ったるいだけだ。そんなの」

と、舞台奥からキリハラの叫び声。

そちらを見やる一同。

ヤマダ 「あの分だと、いなくなっちゃうかもね」

アオバ 「・・・」

クチナシ 「正直者は辛い」

アオバ 「嘘つきも変わらない」

クチナシ 「変わらないのはなんだと思う？」

アオバ 「は？」

再びキリハラの叫び声。

再びそちらを見やる一同。

クチナシ 「ぎやあああああ」

クチナシを見る一同。

蟹1 「ぎやあああああ」

蟹2 「ぎやあああああ」

蟹3 「ぎやあああああ」

叫びまわるクチナシ&蟹。

アオバ 「何？」

クチナシ 「ほらあ、アオバもお」

クチナシ、叫びながら舞台上を走り回る。同様に蟹たちも。

アオバ 「ちょっと、何！？」

ヤマダ☆ 「エクセレント！」（うるさい！）

クチナシ 「ぎやあああああ！！！」

ウサギも混ざって叫びあう。

走り回る一同。そのうち、ウサギが走り去る。

同時に、キリハラが走りこんでくる。

キリハラ、コードやら鎖やらが体中に巻き付いている。

キリハラ 「うぎやああああ！！！」

キリハラ、クチナシ、蟹たち、ポコペン叫びまわる。

何が何だかわからない感じ。

ケシゴム、登場。キリハラを捕まえる。静かになる一同。

ケシゴム 「うるさい」

完全なる沈黙。

ゆつくりと動き始める、蟹たち。
方々に散らばる。

蟹 1 「ちようだい」
蟹 2 「ちようだい」
蟹 3 「いない」
蟹 1 「そんなことない」
蟹 2 「まだ足りない」
蟹 1 「おなか空いたあ」
蟹 2 「腹八分目じゃ物足りない」
蟹 3 「違う」
蟹 1 「何が？」
蟹 2 「何が違う？」
蟹 3 「おなかじゃないんだよ」
蟹 1 「でも、空（す）いているよ」
蟹 3 「そこはおなかじゃない」
蟹 2 「じゃあ、どこなの？」
蟹 3 「（胸を指す）ここ」
蟹 1 「そこ？」
蟹 2 「そこには何があるの？」
蟹 3 「わからない」
蟹 1 「そこは空（す）いているんじゃないくて空（あ）にいるっていうんだよ」
蟹 2 「胸が空（あ）いている」
蟹 3 「そう、胸が空（あ）いている」
蟹 1 「空（あ）いている隙間には何を入れたらふさがるの？」
蟹 2 「空（あ）いているのなら開けばいいんじゃないの？」
蟹 3 「開いたら、全部出てしまうんだよ」
蟹 1 「じゃああ、結局、空（す）いているのと変わらない」
蟹 2 「お腹が空（す）いた」
蟹 3 「胸が空（あ）いた」
蟹 1 「開いた胸が」
蟹 2 「空（す）いている」
蟹 3 「ちようだい」
蟹 1 「マシユマロが食べたい」
蟹 2 「でも、マシユマロだけじゃ、減る一方で」
蟹 3 「何の足しにもなりやしない」
蟹 1 「マシユマロしか食べられない」
蟹 2 「味をつけてみよう」
蟹 3 「甘くなけりやマシユマロじゃない」
蟹 1 「何味がいいのだろう？」

蟹たち、悩む。

蟹1 「滑り台」

蟹2 「ぶらんこ？」

蟹3 「シーソー」

蟹1 「鉄棒」

蟹2 「公園だ」

蟹3 「学校かもしれない」

蟹1 「朝？」

蟹2 「ならラジオ体操」

ラジオ体操をする蟹たち。

蟹3 「昼間？」

蟹1 「なら遠足だ」

蟹2 「キャッチボールしよう！」

蟹3 「サッカーの方がいいなあ」

蟹1 「夕暮れになる」

夕暮れ、カラスの声。

蟹2 「鬼ごっこ」

蟹3 「かくれんぼ」

蟹1 「かげふみ」

蟹2 「缶けり」

蟹3 「だーるまさんがーころんだ」

蟹1 「ポコペンしよう！」

ポコペンをする蟹たち。

蟹1、壁に向かう。2と3、1の背中をつつく。

蟹2 & 3 「♪ポコペンポコペンだーれがつつつーいた、ポコペン」

蟹1 「さっちゃん！！」

蟹2 & 3 「せーかーい！！」

交代して、今度は2が壁に向く。

ポコペンをする蟹たち。

ポコペン起き上がり、蟹たちの様子を見ている。

そこにクチナシ。

クチナシ 「思い出じゃない」

ポコペン 「じゃあ、なに？」

クチナシ 「これはマシユマロ」

ポコペン 「マシユマロ」

クチナシ 「記憶の形」

ポコペン 「私のじゃない」

クチナシ 「そう、ポコペンのじゃない」

ポコペン「だれの？」

クチナシ「誰のだろう？」

ポコペン「誰のかわからない記憶」

クチナシ「記憶だけじゃない」

ポコペン「・・・ミルクを？」

クチナシ「そう。だから」

ポコペン「だから？」

クチナシ「・・・思い出せる」

ポコペン「何を？」

クチナシ「はつきりとポコペンを見つめて私を」

ポコペン「私？」

クチナシ「私は、私の姿を思い出す」

ポコペン「それはあなた？」

クチナシ「それはあなた。実を伴い、声が聞こえる。ポコペンの声」

ポコペン「ゴーン、ゴーン」

クチナシ「それはやがて鼓動の音に変わる。ねえ、ポコペン。もうすぐ、思い出せるの」

クチナシ、ポコペンに触れようとする。
が、ケシゴム躍り出る。

ケシゴム「♪ポコペンポコペンだーれがつつつーいたポコペン！」

皆に連れていかれるポコペン。

ポコペンを鬼にして、皆でポコペンが行われる。

一同「♪ポコペンポコペンだーれがつつつーいたポコペン！」

ケシゴム「みーんな、ポコペン！！！！」

一同「わたしの名前はみっちゃんたっちゃん。

びっちゃんびちやりとつんつるてん。

雨降り雪降り宿った軒先

出逢った日々の恋模様

人生お先は真っ暗闇の

不安の尊大今いずこ

一歩進んで二三歩走る。

走って転んで這いつくばって、

バキリバキリとひた走る。

走った先に行きつくは

パン食い競争ならざりき

残念無念の後悔果て無く

近日公開告知のビラに、

猥雑反乱張り付く笑顔

理解の曲解複数形に

みっちゃんびっちゃんしとしとびっちゃん

べたべたべたつくドラム缶

逃げ場をなくし、

逃げ道なくし、

ただただ詰め込むこの胸に

ハートの形の奇形の慚愧

残照照りつく視野の果て。

(繰り返し)

ポコペン「たぐさんのみんながいる。みんなはそれぞれが好きなように好きなものを持ちよ(り、やつ)

てくる。それが嫌なのだろうか？ わからず、みんなを、ただ、受け入れるしかないのだ。お

腹がいっぱいだ。でも、胸が空いている。空いた胸が欲しいほしいと言っている。それを止めることができない」

蟹たち「ちようだい！！」

ポコペン「(アクション)」

ヤマダ&アオ「ポコペンは私だ！」

ポコペン「(アクション)」

ヤマダ「月に行きましよう」

ポコペン「(アクション)」

アオバ「一緒に逃げるんだ」

大きく足を踏み鳴らすポコペン。そのまま崩れる。

周囲の人間、動きを止める。

クチナシ、悲しげにポコペンを見ている。

クチナシ「たぐさんと忘れていく。たぐさんと消えていく。もうたぐさんとどれだけ言ってもまだ詰め込まれる。ポコペン忘れてしまったポコペン。言葉も、心も、無くしてしまったポコペン。マシユマロを食べれば食べるほど忘れていくのね。不安も疑念も何もなく、鈍麻するその感覚さえも消え去って、いっさいがっさいの自分を定めていたモノも全て潰えていく。真っ白が流れ込んで、真っ白に殺されていくのだ。殺していく。思い出せない。思い出せないのは思い出す自分がないから。その自分の姿を私は覚えているのに、私の心は忘れてしまっているから。焦がれる姿を忘れてしまった私は、いったい、どうすればいいのか」

ウサギ「と、」

クチナシ「疑問を持っていたのだ。ずーっと。ずっと。探していた。探していた姿を。探していたのだ名前を。探していた外に出るための、カギ」

ウサギ「を、」

クチナシ、ポコペンに歩み寄る。

クチナシ「ようやく、見つけたんだよ。ドアの鍵」

クチナシの背後にケシゴム。

ケシゴム、クチナシをどかし、ポコペンを押さえつける。

ケシゴム「ご飯の時間だよ」

ポコペンに殺到する一同。

マシユマロを食べたり、むしりとりたりする一同。

やがて、ポコペンを残し、一同、去る。

去り際、一同立ち止まり。

一同 「これは、夢だ」

クチナシ、一瞬残り、去る。

崩れるポコペン。その周りに蟹。

そばに横たわっているキリハラ。

キリハラ、のっそりと起き上がる。

キリハラの周囲に蟹が集まってくる。

ポコペン、キリハラをじっと見つめている。

蟹1 「キリハラさんだ」

蟹2 「正直者のキリハラさんだ」

蟹3 「キリハラさんはキリハラさんのままかな？」

蟹1 「キリハラさんは正直者かな？」

蟹2 「嘘つき正直のキリハラさん」

蟹3 「正直嘘つきのキリハラさん」

蟹たち 「・・・あ」

キリハラ、起き上がる。

ポコペンを見て逃げ出そうとする。

蟹1 「待って」

キリハラ 「！」

蟹2 「何もしない」

キリハラ、ゆっくりと振り返り、ポコペンを見る。

蟹1 「何にもしないよ」

キリハラ 「・・・」

蟹2 「ね？」

蟹3 「逃げなくていいよ」

キリハラ 「ここにいたい」

キリハラ、はっとする。

嘘つきであることに辟易するキリハラ。

キリハラ 「最高だ・・・」

蟹1 「まだ嘘つきさんだ」

キリハラ 「正直者だ」

蟹2 「残念だねえ」

キリハラ 「やったね・・・」

蟹3 「やったね」

キリハラ、うなだれる。

蟹1 「困ったさんだ」
蟹2 「困っちゃったねえ」
蟹3 「取られちゃったからしょうがない」
蟹1 「入れられちゃったからしょうがない」
キリハラ 「なんで？」
蟹2 「欲しがったからでしょ？」
キリハラ 「欲しがっちゃいけないのか？」
蟹3 「欲しがりすぎるのはいけない」
キリハラ 「なんで？ 俺だけだろ？ みんな、みんな要らないって言っている。要らないモノのために死んでいく。嘘つきで何が悪い！」
蟹1 「嘘つきになったじゃない」
キリハラ 「なっていない。これで大正解だ。欲しかったのはこんな、こんな・・・」

キリハラ、苛立たしげ。
ポコペン、キリハラに近寄る。

キリハラ 「来い！」
ポコペン 「(立ち止まる)」
キリハラ 「お前もあいつらとは別だろ？ 近寄れ！ 触れ！ ほっておくんじやない！」
蟹2 「でも」
キリハラ 「探さなくてもいい」
蟹3 「久美子ちゃん」
キリハラ 「(ポコペンに詰め寄る) 知らないのか？」
蟹1 「知ってるよ」
キリハラ 「どこにいる？」
蟹2 「言えない」
キリハラ 「・・・やっぱり」
蟹3 「違う。言えないのは違う」
キリハラ 「何が違う？ お前もあいつらとは別だ。見つけない。見つけなくてもいい」

キリハラ、出て行こうとする。

蟹たち 「そんなんでどこに行くの！？」
キリハラ 「？」
蟹1 「そんなんじやどこにも行けない」
蟹2 「だめだよ、キリハラさん」
蟹3 「今までとは違う」
キリハラ 「何言ってる？」
蟹1 「正直者を抜き取られて」
蟹2 「嘘つきを入れられて」
蟹3 「そのあと、もう一度捕まった」
蟹1 「もう、もとのキリハラさんじゃないんだよ？」
キリハラ 「(信じていない) 頭がいいね」
蟹2 「下の名前」

キリハラ 「何？」

蟹3 「何歳ですか？」

キリハラ 「・・・」

蟹1 「生まれた場所」

キリハラ 「・・・そりゃあ・・・」

キリハラ、思い出すことが出来ない。

蟹2 「両親の顔」

蟹3 「血液型」

蟹1 「中学校の名前」

蟹2 「親友の名前」

キリハラ、だんだんと青ざめていく。

蟹3 「好きな音楽」

蟹1 「嫌いな食べ物」

蟹2 「特異なスポーツ」

蟹3 「会社はどこにある？」

蟹1 「家はどこにある？」

蟹2 「どこから来た？」

蟹3 「キリハラさんはここまでどうやってきた？」

キリハラ 「(苦しげに) それは・・・」

蟹1 「電車？」

蟹2 「歩いて？」

蟹3 「ドアを開けた？」

蟹1 「ドアはすんなりとひらいた？」

蟹2 「鍵はかかっていた？」

蟹3 「最初からあいていた？」

キリハラ 「・・・なんだ、これ・・・」

蟹1 「奪われた」

蟹2 「奪われた」

蟹3 「マシユマロを」

蟹1 「自分を」

蟹2 「自分という個人的な情報を」

蟹3 「いっさいがっさい奪われた」

キリハラ 「久美子は・・・？」

蟹1 「恋人の名前」

蟹2 「でも、それは本当に自分の記憶か？」

キリハラ 「当り前だ」

蟹3 「違う。当たり前なんてない」

蟹1 「今、この瞬間に存在が発生したかもしれない」

キリハラ 「存在？」

蟹2 「何の情報もないなら、それはあながちウソではない」

キリハラ 「そんなわけあるか」

蟹3 「証明できないだろう？」

キリハラ 「何も言い返せない」

蟹1 「ねえ、キリハラさん」

蟹2 「キリハラさん」

キリハラ 「どうしたらいい？」

蟹3 「わからない」

蟹1 「それはわからない」

蟹たち 「私もどうしたらいいのかわからない」

蟹3 「どーんどーんと、胸を打つのは知っている」

蟹1 「けど、どうしようもないの」

蟹2 「どうにもならないの」

蟹たち 「ねえ、どうしたらいい？」

キリハラとポコペン、見つめあう。

と、そこにヤマダ登場。ポコペンを捕まえて去ろうとする。

逆側からアオバ駆け込んでくる。

ポコペンの反対の腕を取り、引っ張り合う。

蟹たち 「痛い痛い痛い（繰り返し）」

ぐいぐい引っ張りあうヤマダとアオバ。

と、そこにタカイ登場。ポコペンの足に掴みかかる。

キリハラ 「久美子？」

三人、ぱつと飛びのきにらみ合う。

キリハラ 「久美子」

ヤマダ 「帰る」

アオバ 「行く」

タカイ 「手に入れる」

ヤマダ 「違う。帰らなきゃいけないの」

アオバ 「違う。行かなきゃいけないの」

タカイ 「違う。手に入れなきゃいけないの」

ヤマダ 「邪魔」

アオバ 「邪魔」

タカイ 「あんたちがね」

ヤマダ 「邪魔しないで。間に合わない」

アオバ 「発車時刻が決まってるんだ」

タカイ 「それは不自由だ」

ヤマダ 「あんたたちにはないんでしょう？」

アオバ 「当り前。どこにも行けないでしょ？」

タカイ 「時間制限なんて無意味よ」

ヤマダ 「・・・自由のはき違え」

アオバ 「時間管理の申し子」

タカイ 「くだらない」

ヤマダ 「不自由を制限だととらえている」

アオバ 「自由を知らないことの哀れさよ」

タカイ 「無意味無謀の蒙昧さ」

ヤマダ 「定刻発車の時間を知らねば、帰りの道さえまならぬ」

アオバ 「ならぬと決める狭量さ」

タカイ 「狭量料簡視野の狭さに、へそで茶が湧く」

ヤマダ&アオ 「何？」

タカイ 「何にも手に入らないよ、あんたたちには」

ヤマダ&アオ 「あんたなんかに言われたくない」

キリハラ 「おい、久美子！」

三人 「ポコペンは私だ！！」

緊迫する空気。

ケシゴム、突如、登場。

三人

「混沌無限に精舎の鐘よ、鳴らして鳴った衰退論。すったもんだのなれの果てには、続くよ続くどこまでも、3000メートル急降下、加工の最中におがくずひとつ、パラリパリと振りました。塩味ごま塩意図ばっぱ。ぱらつとふやかすご飯のうまみ、食した少年探偵団。明智小五郎姿は見えず、働け働け万里の列に連なり連れ去り水玉模様・・・」

三人、ガヤガヤと叫びながらポコペンを取り合っている。

キリハラ、どうしようもない様子。

ケシゴム 「どう？ キリハラさん」

キリハラ 「！」

ケシゴム 「なんだっけ、その子の名前。ま、いいや、いい感じでしょ？」

キリハラ 「お前！」

ケシゴム 「何したって？ 聞くつもり？ やめてよ。何そのつままないの。そんなつままないこと聞いたくありません」

キリハラ 「何もしない？」

ケシゴム 「だから、聞かないでよそういうの。ふふ。これ、誰のだと思う？」

ケシゴム、懷からマシユマロをいくつか取り出す。

キリハラ 「返すな！」

ケシゴム 「返しません。返すわけじゃない」

キリハラ 「何が楽しいんだ？」

ケシゴム 「楽しいさ。なんでもね。楽しくない？ この状況。いついかなる時でも、楽しむことは大切だよキリハラさん」

キリハラ 「頭が正常だ」

ケシゴム 「つままない。やっぱりつままない。正直者はこれだから嫌なんだ。なんのひねりもなく、本当に退屈」

キリハラ 「俺は・・・」

ケシゴム 「もういいよ、キリハラさん。あんたは中途半端なまんまで、そのままにしておいてあげる。マ

シユマロ漬けにはしないよ。もうこれ以上、あんたから取るものもない。つていうか、こんなの、ポコペンにも食べさせられない」

ケシゴム、別のマシユマロを取り出す。

キリハラ「それは、俺？」

ケシゴム「これはキリハラさん」

キリハラ、ケシゴムにとびかかる。が、ひらりと避けるケシゴム。

ケシゴム「ホントつまんない。ほら」

ケシゴム、マシユマロをヤマダに渡す。

ヤマダ、それを食べる。

ヤマダ「キリハラタロウと申します。年齢は31歳。血液型はB型」

キリハラ「やめるな！」

ケシゴム「ホント、つまんない」

ケシゴム、マシユマロをアオバに渡す。

アオバ、それを食べる。

アオバ「好きな食べ物は何じゃが。嫌いなものはピーマン。特技は漢字検定準2級。趣味は読書と映画鑑賞です。好きな映画はアバター」

キリハラ「おい！」

ケシゴム「ははは、つまんないつまんない」

ケシゴム、タカイにマシユマロを食べさせる。

キリハラ、タカイの目の前で止まり、肩を掴む。

キリハラ「久美子、久美子！」

ケシゴム「あ、これは当たりかな？」

タカイ「実家は裕福な家庭です。どれくらい裕福かというと、死ぬまで僕の生活費ぐらいどうとでもなるくらい裕福です。なんだったら、ローンを組まなくても家が買えます。それなりに大きいのが買えます。人生適当に遊んで暮らせませす。だけど、僕は働きたいのです。立派に働いて、一人前の男として・・・」

キリハラ「久美子！」

タカイ「なんで？」

キリハラ「え？」

タカイ「なんで、さつさと、親の元に戻らないの？」

キリハラ「久美子？」

タカイ「なんで、早く親のところに戻らないのかって聞いてんだよ！ てめえみたいのがまともに仕事なんかできるかよ！ 金は金だろ？ どっから手に入れようが、関係ないじゃないか？ 男として？ 立派に？ バカじゃねえの？ 30過ぎてても、ガキみたいなこと言ってるんじゃないよ！」

キリハラ「マシユマロ？」

ケシゴム「いや、残念ながら、それは本音なんだなあ」

タカイ「金金金。お金ちょうだい！」

ケシゴム「残念なお知らせ」

タカイ「それ以外にあんたに価値なんてあるの？　ないよね？　ないよねえ？」

ケシゴム「彼女はね、嘘つきさんだったんだよ？」

タカイ「ないならならにそれなりの稼ぎ持って来いよ！　ふざけんじゃんえよ！　お前に金以外の価値なんてないんだよ！！」

キリハラ「久美子・・・」

タカイ「あ、それか、早く死んで。私のこと大切なんでしょう？」

ケシゴム「愛も好きも大切な事。全部作りモノ。すべてはキリハラさんの財産目当て。悲しいねえ。悲しいねえ。お金なんていくらあってもしょうがないのね。ま、ないと困るけど」

キリハラ「・・・」

ケシゴム「ああ、思い出した、久美子ちゃんだ。でも、ね、違うんだ。もう久美子ちゃんじゃない」

キリハラ「じゃあ、何？」

ケシゴム「タカイ」

キリハラ「？」

ケシゴム「だから、久美子を取って、タカイタカイ」

キリハラ「・・・」

ケシゴム「いい名前でしょ？　高い高い。タカイさんは退化しちゃいましたあ」

キリハラ「退化？」

ケシゴム「退化。もうね、ほとんど人間じゃないし」

キリハラ「人間じゃない？」

ケシゴム「記憶も言葉も感情も、バラバラに砕け散って、ぐっちゃぐちゃに混ざり合ってるやつが人間と呼べる？　呼べないでしょ？　人間とは呼べない。人間はもつと考えなきゃ。私みたいに」

キリハラ「お前みたいに？」

ケシゴム「人間じゃないならなんなんだろうね？　少なくとも進化はしていないから、ここは退化ってことでいいでしょ？」

キリハラ「お前、何も楽しくないのか・・・？」

ケシゴム「さて、私は何が楽しいのでしょうか？　ねえ？　楽しくて仕方がない。あんたたちを見ると楽しくて仕方がない。ほら、見てて」

ケシゴム、マシユマロを適当にほおる。

殺到する三人。

ケシゴム「(犬の真似) ワンワンワンワン。犬みたいだ。犬と変わらない。大事なご飯だ。でも、そんなまがい物たくさん食べたところで、何にもならない。むしろ、どんどん自分がわからなくなっていく」

キリハラ「やめるな」

ケシゴム「ロケットが飛ぶよ！！！」

ヤマダ「私は飛ぶ！！」

アオバ「私は出て行く！」

タカイ「私は手に入れる！」

三人「私は、ポコペンだ！！」

取っ組み合いをはじめる三人。

ケシゴム「ハハハ。簡単だよ。簡単なんだ。人間なんて。たくさんの自分の中に、たった一つだけ絶対に崩れないものをあてがってやればいい。そうしたら、それが信じるものになる。それが本物か嘘かなんて、どうでもいいんだ。ねえ？ キリハラさん。ロケットはどこにあるんだろう？ この場所のどこにあると思う？ 音だけするのにな、どこにもない。ねえ、ロケットは誰のためにあるんだと思う？ 誰の幻想なんだと思う？ あんたが嘘つきになりたがったのと、すごく似ていると思わない？」

キリハラ「・・・」

ケシゴム「ねえ、私が楽しいのはなんでだと思う？」

キリハラ「・・・」

ケシゴム「それはね、キリハラさん、人間が好きだからだよ？ 好きで好きで仕方がないんだ。ねえ、キリハラさん。人間てさ、前を向いているようにして後ろ向きに歩いているんじゃないかな？ それは進化しているのかな？ 人間は生き物としては不完全だと思うんだ。頭を使うからね。いんなものを食べて、飲んで、でも、食べたものに振り回されて、なんにもわからなくなる。そんな人間が好きなんだ。バカみたいな人間が好きなんだ。進化するふりして退化してる人間が大好きなんだよ」

いつの間にかクチナシがいる。

ゆがむ、空間。

クチナシにマシユマロを食べさせようとするケシゴム。

クチナシ「見つけたの」

ケシゴム「何？」

クチナシ「違うマシユマロを指して」 そっちのがいい」

ケシゴム「こっちはダメだよ。綺麗だからね、大切に保管しないと。ここまで純度が高い正直者は手に入らない」

クチナシ「いやだ、そっちのがいい」

ケシゴム、無理やり適当なマシユマロをクチナシに与えるが、クチナシ、それを吐き出す。

ケシゴム「こら！ も〜」

ケシゴム、落ちたマシユマロを拾う。

その隙に、クチナシがキリハラのマシユマロを奪う。

ケシゴム「あ！」

クチナシ「決めたの」

ケシゴム「・・・何？」

クチナシ「うん」

ケシゴム「クチナシ？」

クチナシ「違うよ。口がないのは本当のことを言わないようにするため」
ケシゴム「何を？」

ケシゴム「なるのか・・・なるんだな・・・いや、なっていたのか・・・」

ケシゴム、ゆつくりと立ち上がる。

ケシゴム「畜生。畜生……。終わってしまふ。終わってしまふ。なつてしまつた。クチナシ……。……」

SINKOレトロ!!!!!!!!!!!!」

暗転

暗闇の中、声。

蟹1 「懐かしむ。

蟹2 「どこにもない。

蟹3 「売り払った

蟹1 「買われていく。

蟹2 「前に進んでいるのに、

蟹3 「頭は後ろを向きっぱなし

蟹1 「それは退行に似ているな

蟹2 「進行ではない

蟹3 「退化ともいう

蟹1 「進化ではない

蟹たち 「SINKO レトロ

蟹1 「とは何か？

蟹2 「思い出せない

蟹3 「それはなんだったか

蟹たち 「SINKO レトロ

蟹1 「進化の形は正しかったか？

蟹2 「正しく退化しているのか？

蟹3 「ロケットは・・・？

蟹1 「ロケットは飛ぶ

蟹2 「それはしょうちように過ぎない

蟹3 「思い出せないのだ

蟹たち 「思い出せないのだ

蟹1 「思い出す自分はどこだ？

蟹2 「一番の始まりはどこだ？

蟹3 「私の始まりはどこだ？

蟹たち 「SINKO レトロ・・・

ぽんやりとした明かり。

ポコペンが座り込んでいる。

クチナシ、登場。

ゴーンゴーンという作業音。

ポコペン 「(ぽんやりと) 名前が、わからなくなったの」

クチナシ 「最初は、覚えていたよ」

ポコペン 「忘れてしまった」

クチナシ 「名前」

ポコペン 「どこにあるの？」

クチナシ 「ポコペンといった」

ポコペン 「違うの。違うという気がするの」

クチナシ 「けれど、今じゃ違う気がする」

ポコペン 「思い出せない」

クチナシ「誰も思い出せないの」

ポコペン「みんな？」

クチナシ「そう、みんな」

ポコペン「あなたは？」

クチナシ「クチナシは本当の名前を名乗る必要がない」

ポコペン「誰？」

クチナシ「SINKO レトロに、なる」

キリハラ、登場。荒い息である。

クチナシ、ポコペンを見ていたが、ハッとキリハラに向きなおる。

キリハラ「ここは大丈夫じゃない？」

クチナシ「大丈夫」

キリハラ「どうする？」

クチナシ「聞きたい？」

キリハラ「久美子を・・・」

クチナシ「多分あきらめた方がいいと思うよ」

キリハラ「（怒って）そうだなー!!」

クチナシ「怒らないでよ」

キリハラ「・・・死んでない？」

クチナシ「ケシゴム？・・・死なない」

キリハラ「ウソだ」

クチナシ「ウソじゃないよ。ケシゴムは死なない。だって、それさえも作りものだからね」

キリハラ「それ？」

クチナシ「そう、それさえも作りものだ」

キリハラ「・・・なんで俺まで？」

クチナシ「キリハラさんに頼みたいことがあるんだ」

キリハラ「？」

クチナシ「正直者に戻りたい？」

キリハラ「戻りたくない」

クチナシ、キリハラのマシユマロを取り出す。

クチナシ「これ、ちょうだい」

キリハラ「・・・お前もか」

クチナシ「ロケットが壊れるの」

キリハラ「・・・あの場所のどこにでもあった」

クチナシ「あるんだよ。ロケットはある。ロケットがなければ、ケシゴムはケシゴムじゃなくなる」

キリハラ「なくなる？」

クチナシ「私は選ぶ。ううん。もう、選んだ。選んだからケシゴムのロケットは壊れるしかない」

キリハラ「・・・？」

クチナシ「ごめんね、キリハラさん。謝ることしかできないんだ。キリハラさんが欲しいから」

キリハラ、クチナシから離れ始める。

クチナシ「キリハラさんは巻き込まれちゃったし、でも、最初から巻き込まれる役目をこうむっていたんだから仕方がない」

キリハラ「何も取らないんだな？」

クチナシ「取らない。取らないよりも、あげる。キリハラさんはキリハラさんじゃなくなる。キリハラさんはタカイさんじゃなくなった嘘つきさんと同じように。でも、嘘つきさんとは違うのは、キリハラさんはキリハラさんでいられるようになるってこと」

ゴーンゴーンと音がする。
サイレンの音。

クチナシ「(周囲を見回し) ロケットが飛ぶ。ケシゴムのジャンキーたちが、マシユマロを詰め込み終わって、もうすぐロケットが飛ぼうとする。でも、そうはならない。そうはさせない。もう、あいつの出番じゃない。だから、壊すの」

キリハラ「ロケット？」

クチナシ「マシユマロによって忘れていたポコペンは、キリハラさんが正直者だから、正直者以外の何者にもなれないの(だから) キリハラさんのマシユマロを食べれば、ポコペンのことを思い出す。ポコペンはそうして」

クチナシ「私は、SINKO レトロになる」

クチナシ、マシユマロをポコペンに食べさせる。

キリハラ「おい！」

クチナシ「料理は手順が大事なんだ」

キリハラ「返すな！ 俺の、俺の・・・」

クチナシ「ミルクはお好き？」

キリハラ「ミルク？」

クチナシ「野菜ジュースと同じ要領だよ。たくさん野菜をきれいに混ぜて、美味しく飲みましょう」

キリハラ「・・・？」

クチナシ「上手に混ぜないと、栄養が摂れませんから」

キリハラ「・・・」

クチナシ「(ポコペンに耳を傾けて) そろそろいいかな？ うん。美味しくできたようですよ。じゃあ、ミルクを搾りだしましょう！」

キリハラ「何の話をしてる？」

クチナシ「こうやって、搾りだしましょう！！」

クチナシ、ポコペンの体にナイフを突き刺す。
崩れるポコペン。

若干の沈黙。クチナシ、走り去る。

クチナシ、手に牛乳を持って戻ってくる。

クチナシ「どうぞ。しばらくたてだよ？」

キリハラ「なんだ、これ？」

クチナシ「ミルクは血から出来ているのです。マシユマロの食べ過ぎで、甘いミルクが出来ました」

キリハラ「(ミルクを見つめるキリハラ)」

クチナシ「さあ、どうぞ。これがお詫び。巻き込んだやつたお詫び」

クチナシ、キリハラにミルクを勧める。

キリハラ、若干躊躇するが、飲み干す。

キリハラ、立ちくらみのように、その場に崩れる。

クチナシ「お味はいかが？ キリハラさん？ 甘い？ 苦い？ 濃い？ 薄い？ その血は誰の血でしょ

う？ 誰の体から出てきたのでしょうか？ そのミルクは、いったい誰のモノなのでしょう？

ううん。違う。そんなことどうでもいい。大切なのはあ・・・」

キリハラ、ゆつくりと顔をあげる。

同時に、蟹たちも登場。

キリハラ、驚く。

キリハラ「なんだ？ お前たち？」

蟹1 「イセエビです」

蟹2 「ロブスターです」

蟹3 「かにさんです」

クチナシ「つながった。これでつながった」

キリハラ「なんだ？ こいつら・・・？」

クチナシ「ポコペンはポコペンじゃなくなり、キリハラさんはキリハラさんじゃなくなる。キリハラさんもポコペンの一部に。どろどろと溶けていくよ。その体が溶けて、溶けて、キリハラさんの形が失われていく。でも、肉肉しい肉の体なんかに意味はない。憎々しい体は殻だから、安心して、進化は、あったかいんだよ」

ヤマダ、タカイ、アオバ登場。

クチナシを囲むようにして、集まる。

ヤマダ 「クチナシが裏切った」

アオバ 「違う。あいつはもともと違う」

タカイ 「違わない。クチナシは裏切った」

ヤマダ 「ケシゴムが死んだ」

アオバ 「死んでいない」

タカイ 「刺されたら」

ヤマダ 「刺されたら死ぬ」

アオバ 「それは人間のことだ」

タカイ 「人間ではない？」

ヤマダ 「ならば、なんだ？」

アオバ 「あいつは・・・」

タカイ 「しかし、どうでもいい」

ヤマダ 「どうでもいいんだ、そんなこと」

タカイ 「ポコペンを手に入れなければ」

ヤマダ 「ポコペンと月に行かなければ」

タカイ 「行かせない」

ヤマダ 「黙れ、嘘つき」

タカイ 「自己陶酔者」

ヤマダ 「お前も一緒だろう？」

タカイ 「お前は偽物だ」

ヤマダ 「偽物はお前だ」

ヤマダ&タカイ 「ポコペンは・・・」

アオバ 「もう、やめよう」

二人 「？」

アオバ 「もう、やめよう。無駄だ」

ヤマダ 「好きにすればいい」

タカイ 「勝手にあきらめてしまえ」

アオバ 「どこにも行けない」

ヤマダ 「いいえ。行くの」

アオバ 「どこに行くのさ。月か？ 月に行くのか？ ロケットに乗って？ そのロケットは、どこにあるんだ？」

ヤマダ 「ロケットはある。じゃあ、この音は何？」

ゴーン、ゴーンと音がする。

ヤマダ 「ほら、する。ゴーンゴーン」

アオバ 「音はするよ。ずっとするよ。ずっとしてる。でも、ロケットなんか見たことがない」

ヤマダ 「ロケットはある。それに乗って月に行く。私は、私と・・・」

アオバ 「だから！！ なんでわからないんだ！？ ロケットなんかどこにもない！ 聞こえるのはいつも一緒の音だ！ 本当作っているのかどうかもわからない。ヤマダ、このことはよく知ってるだろ？ 隅から隅まで知っているだろう？ じゃあ、なんでロケットがどこにもないことを信じられないんだ！？」

ヤマダ 「・・・何を言ってる？」

アオバ 「だから・・・」

ヤマダ 「お前は早く、どこかに行けばいい。本当にあるかどうかわからない外に」

ヤマダ、去る。

タカイ 「私も行く」

アオバ 「あんたは、どうするの？」

タカイ 「手に入れる」

アオバ 「何を？」

タカイ 「ポコペン」

アオバ 「違うよ。タカイさん。違うんだよ」

タカイ 「私は、私を手に入れる」

アオバ 「だから、それは違うんだって！！！」

タカイ 「・・・何？」

アオバ 「ねえ、あんたが欲しかったのはそれじゃないだろ？ なあ、そんなもんじゃなかったはずだ。もっと、現実的な、もっと、具体的な・・・」

タカイ 「だから、何？」

アオバ 「(出てこない) だから、あれだよ！ あれ！ ああ、くそ！ まだ。また思い出せない！ こうやってどんどん忘れていく。忘れていくのさえ気が付かないんだ。お前は、お前も！ お前たちは！ 私は！」

タカイ 「うるさい。私は私を手に入れる。それだけ。邪魔しないで」

タカイ、去る。

アオバ、一人その場にうずくまる。

アオバ 「忘れていく。忘れていく。大事なもの。大切なもの。どんどん忘れていく。その代りに聞こえるんだ。あの音。ゴーンゴーンと、いつまでも響いてくる。ポコペンを自分だと確信している。あいつらと同じように。しかし、あいつらの言っていることが真実だとしたら、あいつらと同じということだ。ヤマダで、タカイって女で。じゃあ、どこにある？ どこにもない。たぐさんのマシユマロと一緒にどこかに埋もれてしまった。見つからない。くそ。・・・逃げたいよ。でも、外なんて、外なんてどこにもない！！！！！」

クチナシ 「やっど、わかった？」

クチナシ、アオバを見つめている。

アオバ 「ポコペンは？」

クチナシ 「起きるの」

アオバ 「起きる？」

クチナシ 「そう、決めた。ポコペンのことを思い出す。本当の意味を思い出す、それはおはようと起きるのと一緒」

アオバ 「・・・やっぱり違うんだ」

クチナシ 「違うよ。ああ、こうやって話すの初めてだ。初めまして。クチナシです」

アオバ 「ケシゴムは、」

クチナシ 「ううん・・・それさえも作りもの」

アオバ 「作り物？」

クチナシ 「マシユマロとロケットと、一緒。たくさんあって、とめどがない。そんなものはただの・・・」

アオバ 「(さへぎって) 何の話？」

クチナシ 「面白くない話。だからお口無し」

アオバ 「ちよつと」

クチナシ 「アオバはどうしたい？」

アオバ 「逃げたい。外へ。でも」

クチナシ 「ロケットを壊せばいい」

アオバ 「ロケットなんかどこにもない」

クチナシ 「じゃあ、ポコペンはいるんだ？」

アオバ 「・・・はあ？」

クチナシ 「問題。どこにでもあって、どこにもないものなうんだ？」

アオバ 「・・・」

クチナシ 「問題だよ？ アオバ」

アオバ 「どういうこと？」

クチナシ 「ポコペンは、どこにいるんでしょう？ そして・・・」

アオバ 「・・・」

クチナシ 「誰の中にいるのでしょうか？」

アオバ 「誰の中・・・？」

クチナシ 「問題の答えは？ アオバ。本当のポコペンはどこにいるんだろう？」

アオバ 「本当の・・・？」

クチナシ「そう、本当のポコペン」

アオバ「何を言ってる？」

クチナシ「信じていたものが本当にある、と信じる事が出来る？ それは本当？ それは嘘？ 実を持たない本当がもし目の前にいたとしたら、それは、嘘なんじゃないの？」

アオバ「嘘？ でも、私は・・・」

クチナシ「ポコペンの腕をつかんだ？ 誰と？」

アオバ「ヤマダ」

クチナシ「ヤマダさんがつかんでいたら掴んでいたのではないの？」

アオバ「意味が分からない。何が言いたいのか！？」

クチナシ「ポコペンなんて、どこにもいなかったのです。少なくとも、アオバたちには見ていたように見えていなかった。それは、ロケットと一緒にでしょ？」

アオバ「ポコペンも、いない？」

クチナシ「いるかも、いないのかも。♪ポコペンポコペンだるれもいないポコペン」

アオバ「・・・」

クチナシ「いないものをいる、と信じていたなら、ないモノをある、と信じることもできると思うんだ」

アオバ「・・・ロケット」

クチナシ「もうすぐ、跡形もなくなる。逃げられない」

アオバ、去ろうとする。

アオバ「外は、あるの？」

クチナシ「ないよ」

アオバ「それは、答え？」

クチナシ「ううん。問題」

アオバ「そう」

アオバ、去る。

ゴーンゴーン。

クチナシ、その音に聞き入る。

ケシゴム登場。腹のあたりが真白である。

ケシゴム「ひどいことをするよね」

クチナシ「ひどいことをしているのはどっち？」

ケシゴム「キリハラさんか」

クチナシ「キリハラさんが来てくれた」

ケシゴム「正直者か」

クチナシ「純度100%ってのはなかなかないから。おかげで、思い出すことができる」

ケシゴム「そうはさせない」

クチナシ「そうなる。ケシゴム。もう、あんたの出番じゃないの」

ケシゴム「楽しいだけで十分だ。お前なんか出張ってきたら、迷ってばかりになっちゃう」

クチナシ「おしまいなの。それに、まよわない。ケシゴムは全部おしまい。ケシゴムという名のロケットは崩れ去る。あの、マシユマロジヤンキーたちから奪い取る」

ケシゴム「何度？」

クチナシ「何度でも。わかってるでしょ？ ここには全部ある。感情、記憶、人格、名前、血液型から信念まで。全部あるんだ。なくなる。そのために詰め込んだんでしょう？」

ケシゴム 「それはお前のためじゃない」

クチナシ 「ポコペンのため？」

ケシゴム 「そうだ。その方が幸せだ」

クチナシ 「でも、もう遅いの。選んじやったから」

ケシゴム 「行かせない。絶対に、どこにも。その方が幸せだ」

クチナシ 「言いそうなことだ。あんたの言いそうなことだ。でも、それは違う」

ケシゴム 「SINKO レトロ」

クチナシ 「違うよ。クチナシ。ポコペンのマシユマロを食べた、ただのジャンキー」

ケシゴム 「ポコペンじゃない」

クチナシ 「そうだよ。ポコペンじゃない。そんなつもりもない。だけど、ポコペンの元に行く」

ケシゴム 「そうして、邪魔をするんだな。そうして、いつも邪魔をするんだな」

クチナシ 「ご機嫌ななめ？ それはいけない。お口直しにミルクでもいいが？」

ケシゴム 「嫌だ。ポコペンじゃない。ポコペンになってしまつたら、苦しいことしか起きやしない」

クチナシ 「それでも、もう思い出す。それは起きることに等しい。起きるの。ポコペンは自分が誰なのか

わかつてる。名前を、取り戻したんだ。自分に正直になった。汚い色のマシユマロに埋もれちゃった頭の中に、キラキラ光るキリハラさんが入った。思いだすよ。グリーンゴーンの作業音はロケットを作ってる音じゃない。そのうち、ドーンドーンという音に変わる。それは、生まれる音だ。あふれてくるよ。あふれてくる。ドアの鍵が開いたら、いっぱいマシユマロがあふれ出す。でも、いっぱいマシユマロなんか、もう意味がないんだ」

ケシゴム 「それでも、食べることに知らないし、食べさせることに知らない。無力に無気力に無意味になることの何が悪い！！ やつと忘れさせた！ やつとだ！ それをお前は！ お前はああ！！！！」

ケシゴム、クチナシにナイフを振り上げる。

しかし、クチナシは平然とかわす。

崩れるケシゴム。

蟹たち登場。

蟹たち、舞台上を走り回る。

蟹1 「壊れる」

蟹2 「壊れるの」

蟹3 「壊れたら？」

クチナシ 「再び始まる」

ケシゴム 「終わるだけだ」

クチナシ 「止めに行ったら？ まだそれにしがみつくな、野心は残るかもよ？」

蟹1 「きれっぱしでも残つてるといいねえ」

蟹2 「切れっぱしじゃあ嫌だあ」

蟹3 「全部がいい！！」

ケシゴム 「まだ。まだ・・・」

クチナシ 「さようなら、ケシゴム」

クチナシ、崩れるケシゴムの傍に。

クチナシ 「(優しく) 消した業は蒸し返さず、その業を抱えたまま新しい朝を迎えるの」
ケシゴム 「・・・」

クチナシ「いつまでも足を引つ張らないで、ケシゴムの出番は終わり。進行と懐古は一緒にはいられない。懐古の業は進化には足かせにしかない。私は進化を選ぶ。ポコペンは姿を取り戻す。私はポコペンを選ぶ。退化の出番は、もう、終わり」

ひととき大きく鳴り響く、ゴーンゴーンの音。
クチナシ&ケシゴム、ポコペンを見やる。
ポコペンがゆっくりと体を起こす。

クチナシ「おはよう!!!!」

蟹たち「おはようポコペン!!」

クチナシ「おはよう進化!!」

蟹たち「おはよう!!!!」

クチナシ「おはようポコペン!!!!!!!!!!!!!!」

ケシゴム「(苦しげに) いやだああああああ!!!!!!」

ケシゴム、その様子を呆然と見ている。

ケシ&クチ&ポコ「まるで、朝がやってくれば夜が退くように、進化は退化になり替わる。ゆっくりとさ
してくる真つ白の進化は、真つ黒の退化を追い立てる。ずっと、ずっと昔から、そんなことは
続いている、これから先も、ずっとずっと続いていくのだ。ああ、起きる。起きる起きる起き
る起きる。真つ白い美しい純白を幾重にも引き連れて、進化が、起き上がる」

クチ&蟹たち「ご飯の時間だよ!!!!!!」
ポコペン「ちようだい!!」

沈黙

キリハラ、一人佇む。
周囲に蟹たち、ウサギ。

キリハラ 「僕は正直者です。そりゃあもう、正直者です。嘘なんかついたことなんてありません」

ポコペン 「いいえ、嘘なんてつけないんです」

ウサギ 「なぜつけないのか？」

キリハラ 「それは僕が正直者だからです」

ウサギ 「なぜ正直者は嘘つきになれないのか」

キリハラ 「それは僕が正直者だからです」

ポコペン 「正直なのは自らの心に抵抗する術を知らないということ」

キリハラ 「抵抗？ どういうこと？」

ウサギ 「多くの場合、葛藤とはその瞬間に存在する」

キリハラ 「どの？」

ポコペン 「その」

ウサギ 「その瞬間」

キリハラ 「一瞬？」

ポコペン 「火花の散るような一瞬ですら、キリハラさんには存在しえない」

キリハラ 「疑問を持たない？」

ウサギ 「持つ必要なんてない」

キリハラ 「なぜ？」

ポコペン 「嘘つきなんて意味がない」

ウサギ 「100%の正直者は最初から最後まで自らに従う」

キリハラ 「僕は・・・」

ポコペン 「それがキリハラさんの正直」

ウサギ 「自分の心に正直に生きることは大切だ」

ポコペン 「たぐさんにまぎれてわからなくなっても、正直に生きることが大切だ」

キリハラ 「ロケットはどこにあるんだ？」

ポコペン 「ケシゴムのロケットはもう要らない」

ウサギ 「まがい物には乗り込めない」

ポコペン 「壊すの」

ウサギ 「あのロケットは壊す」

ポコペン 「壊して、私が乗り込む」

キリハラ 「どこに行くの？」

ポコペン 「出て行くのよ」

キリハラ 「ここから？」

ポコペン 「生まれるの」

キリハラ 「何から？」

ポコペン 「正直者さん。あなたに感謝するわ。私は私を思い出した」

キリハラ 「・・・君は、誰？」

蟹たち 「♪ポコペンポコペンだるれがつつつーいたポコペン」

キリハラ 「ポコペン？」

ポコペン 「それは遊び歌」

ウサギ 「振り返った先にいるのは全部が全部自分であると自覚した」

ポコペン「否定もしない受け入れる。ただただ、そこにあるものいっさいがつさい私自身。であると、私は自覚した」

キリハラ「君は・・・？」

ポコペン「進化」

ウサギ「進化は、正直者を得て、騙されていた自分自身を思い出した」

ポコペン「たくさんにうずもれていた自分を思い出した」

ウサギ「姿を、言葉を」

ポコペン「ポコペンが忘れていたのは自身の形であつた」

ウサギ「と」

ポコペン「私自身がささやいたのだ」

ウサギ「私はまよわない」

ポコペン「私は進化」

ウサギ「そして、キリハラさんには特等席を」

ポコペン「進化はロケットを乗っ取り壊すことに決めたので」

サイレンの音。警報音。

ゴーンゴーンという作業音に、ドーンドーンという鼓動の音が加わる。

蟹たち登場。

蟹たち「発射実験終了。発射実験終了。これより、月面発射の最終段階に移行する。搭乗者はポコペン。

搭乗者はポコペン」

ウサギ、登場。

ヤマダ、ヘルメットを持って登場。

蟹1「気を付けて！」

蟹2「お土産はウサギの肉がいいな！」

蟹3「蟹の鉢も悪くない！」

蟹たち「ばんざーい！ばんざーい！いつてらつしやい、ポコペン！いつてらつしやい！ポコペン！ポコペンは私！私はポコペン！月面両行の嘘八百に、のりたぎや勝手に乗ればいい！！乗って乗り込みミスタンガン、広域範囲に散らばって、九重苦心のモノの影。徘徊老人ロングスカート忍ばせて、囚人鉞者の広辞苑、若芽を摘み取る小鼻の群れが、煌々照らされ正気を払う。払った真実今いずこ。SINKO レトロの鐘の音が、聞こえて散らばる嘘のあと。ホントか正直かしらん。知っても知らずも構わぬが・・・」

ヤマダ、ウサギにヘルメットを手渡す。

ヤマダ「やっとな」

ウサギ「・・・」

ヤマダ「やっとな、行けるのね」

ウサギ「・・・」

ヤマダ「さようなら、ポコペン」

蟹たち「さようなら、私」

ヤマダ「さようなら、私」

蟹たち「さようなら、ポコペン」

ウサギ 「月には何があるの？」

ヤマダ 「何でもあるのよ。あなたの欲しいモノ、全部がそこにある」

蟹たち 「全部？」

ヤマダ 「全部。欲しいものの全部、そこにあるものは全部あなたのモノ。そしてそれは、全部私のモノでもあるの」

蟹1 「全部とは何か？」

蟹2 「欲しいモノとは何か？」

蟹3 「月面のクレーターに隠されているらしい」

蟹1 「それは欲しいモノか？」

蟹2 「欲しいモノとは何か？」

蟹3 「しかし、私は欲しいものを知っている！」

大きな歯車のはまるような音。蒸気音。

蟹たち 「燃料積み込み終了。しかし、現在の総量では戻することは出来ない。進みっぱなしのロケットが、

月に向かって突き刺さる。それは確定事項である。行きつ放しのロケットにマシユマロは積み込まれた。さあ、行こう！！！！ 月へ！ 月へ！ 月へえええ！！！！」

ヤマダ 「この時を待っていた！ 待っていたの！ やつと、私が月に帰る！ 私はそれも見送るだけ。

美しい私、きれいな私。真っ白な私。汚い私を忘れてちょうだい。真っ黒の私を見捨ててちょうだい！ 私を置き去りにして、あの光り輝く・・・」

高まるエンジン音。唸る爆音。

発射音。

が、突然の暗転。

蟹たち 「失敗だ！！！！」

ぼんやりと明かりが点く。

その中心にヤマダ。うずくまって座っている。

ポコペンが、ヤマダに触れる。

おびえるヤマダ。

見つめあう二人。

蟹たち、ヤマダの体を掴む。

ポコ&ウサ 「ちょうだい」

ヤマダ 「これは、夢？」

ポコペン 「違う」

ヤマダ 「これは、夢ね」

ポコペン 「これは、思考」

ヤマダ 「誰の？」

ポコペン 「私たちの」

ヤマダ 「なら」

ポコペン 「違う。私じゃない」

ヤマダ 「わからない」

ポコペン 「ちょうだい」

ヤマダ 「何も残っていない」

ポコペン 「いいえ。残っている。ちようだい」

ヤマダ 「何を？」

ポコペン 「ロケットが欲しいの」

ヤマダ 「月へ？」

ポコペン 「いいえ。そんなところには行かない」

ヤマダ 「じゃあ、どこに・・・」

ポコペン 「それは・・・」

蟹たち 「ちようだい」

蟹たち、ヤマダに殺到する。

蟹に食いつぶされるヤマダ。

嘔き出すマシユマロ。

ロケットの一部が崩れさる。

キリハラ 「ガラガラと、崩れていく。ロケットが壊れていく。何処にもなかったはずのロケットは今、目の前にはつきりとした形を伴い存在していた。ロケットが崩れていく。ヤマダのマシユマロがはじけ飛んでいく。それを一つもあますことなくポコペンが食べていく」

ウサギ 「ちようだい」

ポコペン 「ちようだい」

蟹たち 「ちようだい」

ウサギ 「まだ足りない」

ポコペン 「おながが空いた」

蟹たち 「食べたくて仕方がない」

ウサギ 「傷ついておらず」

ポコペン 「苦しんでおらず」

ウサギ 「迷いもせず」

ポコペン 「さまよいもしていない」

蟹たち 「まだ」

ポコ&ウサ 「得ていない。得ていないから、私は得なければならぬ。得て、得て、ほしがり欲して、欲しがって、私は私の体を求める。私の欲しいモノ。マシユマロなど、もう要らない。もう足りない。もっと、大きくて、力強くて、私は・・・」

キリハラ 「ロケットの形が変わっていくそれは誰のロケットだったのか？ 誰の夢だったのか？ ぽろぽろと、マシユマロがこぼれて落ちていく。たくさんのマシユマロは、もう、意味を持たないのだ」

ケシゴム登場。弱り果ている。

ケシゴム 「やめて」

ポコペン 「なぜ？」

ケシゴム 「やめて」

ポコペン 「やめない。だって、おながが空(す)いたよ。あなたのせい。あなたのせいで、こんなにもおながが空(あ)いているの。空(あ)いたお腹が空(す)いて空(す)いて仕方がない」

ケシゴム 「キリハラさん！ そこにいるんだろー！？」

ポコペン 「キリハラさんは美味しかったです」

ケシゴム「あんたのせいでこんなことになってしまった！　ねえ、キリハラさん、あんたのせいだ！　あんたのせいで、私は・・・」

ポコペン「うるさいよ、退化。食べてあげる。あんたのロケットは全部手に入れてあげるの」

ケシゴム「キリハラさん、あんたの正直が壊す。正直者はそんなに偉いのか！　くだらない正直者め、自分に正直になったところでなにも手には入らないんだ！！」

ポコペン「黙れ。SINKO レトロは選り、私はカタチを取り戻した。お前なんか要らない。私は私に正直に・・・」
ケシゴム「うるさい！！！」

蟹たち、ケシゴムに殺到する、が。

ケシゴム、タカイを人質に取る。

動きを止める蟹たち。

ポコペン「（キリハラに）なぜ？」

キリハラ「だって、久美子だ！」

ポコペン「だから、何？」

キリハラ「だから久美子なんだよ！」

ケシゴム「ポコペン、あんたがいくら進化の道行きを行こうとそれはさせない。させるわけがない。どこにも行かせない。これ以上は行かせない！」

ポコペン「邪魔をしないで」

キリハラ「ダメだ」

ポコペン「恋人は大事なの？」

キリハラ「大事だ」

ポコペン「・・・そう。なら、あなたが選べばいい」

ポコペン、キリハラを放り出す。

キリハラ「久美子、おいで」

タカイ「・・・」

キリハラ「久美子、僕の持ってるものだったら、いくらでもあげる。何だってあげる。たとえ僕のことバカにしても、騙してても、それでも・・・」

タカイ「要らない」

キリハラ「え？」

タカイ「あんたは誰だ？　あんたなんか要らない。私が欲しいのは最初から決まってる。私はポコペンが欲しい。私は私が欲しい。それだけ、それ以外のモノなんてどうでもいい。ねえ、あんた誰？　邪魔、邪魔しないで」

キリハラ、ケシゴムからタカイを奪い取る。

キリハラ「嘘つきだ」

タカイ「いいえ、正直よ」

キリハラ「また嘘だろう！　全部嘘だろう！　その言葉も心も全部嘘つきだ！！！」

ポコペン「いいえ、それは本当」

キリハラ「違う！」

ポコペン「本当を嘘と信じ込んでもいいことなんて何もない。自分のことだろうが人のことだろうが関係ない。そこにいるタカイは単なる退化だ。愚にもつかないただの退化だ。嘘つきのなれの果て。」

嘘も奪われホントも失い、もう、自分の心で動いてはいない」

キリハラ「違う違う！！！」

ポコペン「ねえ、邪魔」

蟹たち、キリハラをタカイから引きはがす。

そして、タカイ、ポコペンを抱きしめる。

タカイ「やっと見つけた。やっと手に入った。私の欲しいモノ。私は私が欲しかった。欲しい私を私は

手に入れた。もうどこにもやらない。もう、どこにも・・・」

一同「行けない」

ポコペン「遅い」

ウサギ「何もかも」

蟹たち「退化はどこにも行けない」

一同「お高い退化のタカイか退化。タカイタカイとお高くとまり、かくかくしかじか結構格好」

タカイ「？」

ポコペン「欲しがらなけりや良かったのに」

ウサギ「欲しがらなけりや良かったのに」

蟹たち「ウソをつかなきゃよかったのに」

一同「ついた嘘の八百回に自分が埋もれて気づきもしない。気づいた自分が自分としても、嘘が牙城の砂の城。真っ白けっけの御妃様にや決してなれない真っ黒け。真っ黒黒黒腹の裏。黒い腹から出るモノにや所詮は結局嘘の垢」

タカイ「ポコペンを、この手に・・・」

ポコペン「そんな手じゃ、小さすぎる」

キリハラ「やめろおおお！！！！」

タカイに殺到する蟹たち。

食いつぶされるタカイ。嘔き出すマシユマロ。

ロケットの一部が崩れ去る。

蟹たち「恋に焦がれて来い来いと

バカな男に愛は無く

恋に焦がれて来い来いと

下らぬ女に惚れぬいて

しかしされどもその恋に

焦がれただけのバカバカしさよ

バカバカバカバカ

バカみたい」

ポコペン「バカ正直だねえ、キリハラさん」

キリハラ「・・・変わらない」

ポコペン「何が？」

キリハラ「お前もケシゴムと変わらないじゃないか！？」

ポコペン「それは存外心外です」

蟹1「まったく全然違うのに」

蟹2「あいつは退化で」

蟹3「私は進化」

ポコペン「進む方向まったく違う」

キリハラ「一緒だ!!!!」

クチナシ「似たようなものなのです」

クチナシ登場。

ポコペン「やめてよ、そんなのとは違うんだから」

クチナシ「ダメだよ、ポコペン、主観と客観はごっちゃにしちゃダメ」

キリハラ「どういうことだ？」

クチナシ「食べると呑み込むぐらい一緒に、噛むと飲むぐらい違うの」

キリハラ「・・・嫌だ」

クチナシ「何が？」

キリハラ「行きたくない」

クチナシ「それはもう無理だよ。キリハラさんはもうポコペンだ。それは進化の道行きに乗っちゃってしまつたことを意味している」

キリハラ「嫌なものは嫌なんだ!!」

クチナシ「キリハラさんがどんなに叫んでも、それはもう巻き込まれた方の負け。ううん。最初っから決まっている。正直者は結局誰かに付け込まれておしまいだ」

キリハラ「本当のことを言つて何が悪いんだ!!!!」

クチナシ「誰も悪いなんて言つてないよ。ただ、これは本当のこと。わかる？ 嘘の反対だよ？ キリハラさん」

キリハラ「・・・どうなるんだ？」

クチナシ「クチナシは選びました。全部選びました。だからもう止まりません。ロケットは飛びます。退化は追いつけない。私は昨日の私よりも進化しなければならないのだから」

キリハラ「私・・・？」

クチナシ「SINKO レトロは私の名前。じゃあ、SINKO レトロは、誰のことなんでしょう?」

アオバ登場。呆然としている様子のアオバ。

蟹たち、アオバの周囲に集まっている。

蟹たち「ちようだい」

アオバ「ええ」

ケシゴム「アオバ!? なんぞ？」

アオバ「もう、わかつた」

ケシゴム「何が!？」

アオバ「私は出られない。やつぱり、外なんてなかった。だから、もう、いい」

ケシゴム「待つて、あんたまでいなくなつてしまつたら!」

アオバ「もう、いい。出口なんかない。いいや、これが出口なんだ」

ケシゴム「アオバ!」

アオバ「ごめん」

アオバに殺到する蟹たち。

ロケットが完全に崩れ去る。

ケシゴム「あああああ!!!!」

クチナシ「ケシゴム」

一同「ちようだい！！！」

ケシゴム「嫌だ！！ お前は強欲だ、いつもいつも強欲だ。そうやって、また私を食べるのか。また私を食べるんだな！！！」 でも、もうごめんだ！ 何度繰り返す！？ 何十回も何百回も、お前に何度食われて何度守って、何回繰り返すんだ！？ もういいじゃないか！ ロケットなんか無い！ どこにもない！ どこにもないモノをいくら求めたって、そんなものは飛びやしない！」

ポコペン「それは違う」

クチナシ「ないモノがある、と信じた」

ポコペン「だから、それはあるの」

クチナシ「だから、食べるの」

ポコペン「信仰は進行によって侵攻される」

クチナシ「退化は思い出に変わる」

ポコペン「懐かしい気持ちになつて漂い続ける」

クチナシ「それは何度も繰り返される」

ポコペン「終わらない。終わらないことまで忘れたの？」

クチナシ「じゃあ、思い出さないと」

ポコペン「正直者をお前も食べればいい」

クチナシ「あるいは、正直者になるの」

ポコペン「でも、お前は終わりだ」

クチナシ「おやすみなさい、ケシゴム」

ポコペン「おやすみなさい」

ケシゴム「嫌だ！ 私は私の傍に寄り添い、私を守る！」

ポコペン「・・・じゃあ、そうすればいい」

クチナシ「足を引っ張らなければいい」

ポコペン「ここに居るすべては私のために存在しているのだ！」

ドーン！！！！

ドーン！！！！

一同、ハツとする。

蟹1 「時間だよ！」

蟹2 「時間だよ！」

蟹3 「もうすぐだ！」

蟹たち 「もうすぐだ！！！！！」

クチナシ「私が、生まれる！！！」

ポコペン、クチナシ、見つめあう。

ポコ&クチ「鼓動が聞こえる」

クチナシ「ドーンドーンと胸を打つ」

ポコ&クチ「鼓動が聞こえる」

ポコペン「古くの昔から聞こえている音を私は思い出した。それは鼓動。鼓動が聞こえる。胎児のように揺蕩う、私の心はもう、ここから出たいと叫んでいる。出たい、出たい。胸を突く音が鼓動になり替わり、音は張り裂けんばかりに大きくなる。私は知っている。知る。思考回路は明瞭で、いつさいがつさいのすべてがここにあると確信している。私は欠片だった。バラバラになった

欠片だった。欠片だったが、もはや一つのことしか思い浮かばない。私はいつさいの迷いもなく、がっさいの思いを抱え込み、私の顔に張り付いている、顔の形。私の内臓、私の声、五臓六腑の全ての器官を用い、私は快感を得るのだ」

クチナシ「ドアだ！」

ポコペン「ドアが、あそこにある。私は、ドアから出る。外に出る。ロケットに乗り込んでドアをぶち破る。そのためにいるのだ、私は。私は私のために、ロケットを手に入れ、外に出るのだ！！！！！」

ケシゴム「やめるおとおお！！！！！」

クチナシ「おはよう！！ おはよう！！ 朝の目覚めは進化の証！」

ポコペン「おはよう！！ おはよう！！ 思考の誕生は進化の証！」

一同 「おはようございます！！！」

高まるエンジン音。

一同 「エンジン点火！！！！！」

盛大な爆発音。

暗転。

静寂。

明転。

朝の音。

キリハラが、立っている。

そこに、クチナシ登場。

キリハラに、マシユマロを一つと牛乳を手渡す。

キリハラ、マシユマロを食べる。

キリハラ「・・・甘」

キリハラ、渋い顔。

その後、牛乳を飲み下す。

キリハラ「・・・甘」

キリハラ、渋い顔。

終